

■はじめに

このセッションプレイレポートは2021年夏に開催された、富士見書房より発売されている『ダブルクロス The 3rd Edition ステージ集 ディスカラードレルム』（矢野俊作、F.E.A.R 著）掲載の「オーヴァードアカデミア」ステージを舞台とするダブルクロスのリレーキャンペーン（いわゆる水曜アカデミア）第3話「No One's Life」のプレイレポートとなります。尚、当セッションでは上記以外にも『ダブルクロス The 3rd Edition ルールブック 1』をはじめとした関連書籍を使用しましたがそれらの紹介は省略します。当該セッションは七種PLがGMを勤めて下さった第1話「Into the Storm」、佐藤PLがGMを勤めて下さった第2話「Renegade Circus」を踏まえたものであり、このプレイレポートを読む前に該当するプレイレポートを読むことをお勧めします。

このプレイレポートでは筆者（GM）の都合により誤字・脱字等の修正を行いました。併せてご了承ください。また、基本的に鍵括弧のついた発言はPCのものでついていない発言は原則、シーン内では情景描写、注釈上ではPL発言です。

このプレイレポートの再配布についてはご自由にどうぞ。

□目次

■はじめに	1
□目次	1
■トレーラー	3
■登場人物	4
■シナリオハンドアウト	6
■オープニングフェイズ	7
▽シーン1：期待	7
▽シーン2：不安	9
▽シーン3：臆病	12
▽シーン4：配役	15
■ミドルフェイズ	18
▽シーン5：邂逅	18
▽シーン6：足跡（情報収集）	23
▽シーン7：歩武	25
▽シーン8：羨望	27
▽シーン9：再会	28
◆戦闘	30
▽シーン9 アフター	34
▽シーン10：正体(情報収集)	36

▽シーン 11：告白.....	37
▽情報収集.....	44
▽シーン 12：登壇.....	45
■クライマックスフェイズ.....	55
▽シーン 13：閉幕.....	55
◆クライマックス戦闘.....	60
▽シーン 13 アフター.....	74
■エンディングフェイズ.....	79
▽シーン 14：A Life.....	79
▽シーン 15：Life Is Trifles.....	82
▽シーン 16：Another Life.....	82
■終わりに.....	88

■トレーラー

七不思議一

少年少女の語るありがちな噂

森を蠢く怪物

同じ貌の死体

その物語はどうやって生まれたのだろう

別れた心

別れた身体

“これは一体誰なの？”

なかったはずの物語

いなかったはずの役者

紳士淑女の皆様

幕の上がない舞台へようこそ

ダブルクロス The 3rd Edition

『No One's Life』

ダブルクロス—

それは裏切りを意味する言葉

■登場人物

◆PC

▼“アイロニー・オブ・フュイト”^{あめみや みう} 雨宮 未羽

ブリード ピュア

シンドローム ノイマン

『父親』の亡き妻のクローンでありアカデミアではこの世のありとあらゆる“難問”と向き合う「数理部」に所属する高等部の女子生徒。クールな傍観者という口調だが感情豊かでユーモアがある。

戦闘では《雨粒の矢》による範囲攻撃と《常勝の天才》によるバフが強力。今回新たに蘇生手段として《タイムリーオペレーション》を引っ提げて来た。

▼“ヒーロー・ソング”^{きりしま けいち} 桐島 啓一

ブリード クロス

シンドローム ソラリス/ウロボロス

UGN 職員を親に持ち S ランクオーヴァードの姉がいる高等部の男子生徒。その先に闇があろうと構わず目の前の問題に踏み込む。他人の事情に深入りしすぎたツケが回ってくることも…

戦闘では《狂戦士》でバフをまき《デイヴィジョン》を軸に攻撃をいなす。今回《アクアウィターエ》によって蘇生手段も手に入れた。

▼“オーダー・キトウ”^{すみれ} 佐藤 堇

ブリード クロス

シンドローム ソラリス/ハヌマーン

遺産を研究していた元 FH で高等部の女子生徒。おそらく PC たちのなかで最もクールで理性的。情緒が未発達だと PL は語り、それゆえか大きく感情に基づいた言動に理解を示さず、ときには痛烈な言葉の刃さえ向ける。

《絶対の恐怖》に《彫像の声》と《風の渡し手》をのせ複数の敵をなぎ倒しつつ行動値を下げるコンボが強力。今回《シルフの詩》で《風の渡し手》の回数制限という弱点を克服してきた。

▼“ベゼウエイン・メカネス”^{ななくまき ならん} “歩き出す鉄騎” 七種 七楽

ブリード クロス

シンドローム ブラックドッグ/モルフェウス

元 FH チルドレンで試作戦車「オルトロス」へのるための手術の影響で日常生活を歩行支

援機に頼っている高等部の男子生徒。FHでは「14号」と呼ばれていた。付き合いがよくなくてもやり通す少年。ただしかなり臆病な面もある。

「フォールンマシン」を軸に装甲無視ダメージを叩き込む。今回《マグネットフォース》と「クリスタルシールド」を構え、ガード屋の性能を獲得する。

◆NPC

▼“反プロクルステス”犬走 遊いぬぼしり ゆう

ブリード トライ

シンドローム ブラム＝ストーカー/ブラックドッグ/ノイマン

1年前に数理部へと入部した高等部の女子生徒。ミステリアスを装うが天然気味。

▼“腐り落ちた自叙伝”桜庭 清羅フルハイドラジラムジャケット (FHJ) きくらば せいら

ブリード トライ

シンドローム エンジェルハイロウ/モルフェウス/ノイマン

筆者 (GM) の持ち PC。マスターアルカナムに育てられた過去がある。口調とテンションの変化が激しい高等部の女子生徒。

▼ソフィア・ホーエンハイム

ブリード クロス

シンドローム モルフェウス/ウロボロス

初等部の女子生徒で C ランクオーヴァード。イージーエフェクトを使える。おどおどしているがそこそこ頑固。

▼“マスターアルカナム”アインスホムンクルス

ブリード 不明

シンドローム 不明

オーヴァードの複製で 500 年以上生きたシナリオボスのジャーム。失敗作として生まれそれなりに悲しき過去を持っているが気にしなくて良い。

◆その他

▼七不思議

明らかに 7 つ以上ある島の噂。取りつく仮面だとか読めない文字のノートだとかいろいろとあるが現在強い話題は森に関する 2 つの話である。

1 つが何年か前から語られている同じ貌の生徒の死体、森で複数人が首を吊ったような場所がありどれも同じ貌をしているという。だがどんな貌だったか誰も覚えていない。

もう 1 つが森を歩き回る怪物の話で、こちらはつい最近語られるようになった。人間のつぎはぎだったり、全身が砂でできた人を見たというのが主な体験談だ。

■シナリオハンドアウト

▼雨宮美羽

ロイス:犬走 遊 推奨感情 P:任意/N:任意

キミの所属する数理部には犬走遊という少女が居る。物静かな少女だが常に腕やら頭やらに血で滲んだ包帯が巻かれている。

ある日彼女はキミにとある質問をしてきた。曰く、主役を奪う脇役の心情とはどんなものかということだった。

そして、彼女は森にある同じ貌の首つり死体について話した。

▼桐島啓一

ロイス:マスターアルカヌム 推奨感情 P:任意/N:任意

新しくできた七不思議の噂に興味を示した清羅がキミの部屋にやってきて肝試しをしようと言って来た。

しかし、それは建前で彼女は噂にマスターの影を感じるという。

▼佐藤堇

ロイス:カルペ・ディエム 推奨感情 P:任意/N:任意

ある日、キミは懐かしい顔を見た。カルペ・ディエムだった。

彼女はこの島の遺産の調査状況についてキミに語った。放って置けば彼女たちは危険な遺産を手にするだろう。

▼七種七楽

ロイス:ソフィア・ホーエンハイム 推奨感情 P:任意/N:任意

ボランティア部の部室に居たミの元に依頼者がやってきた。清羅の同室のソフィアだ。

清羅の話からキミを何でも屋と認識した彼女は臆病な自分を克服するため学園内に広がる七不思議の噂を利用した肝試しに付き合っ欲しいと依頼される。

■オープニングフェイズ

▽シーン1：期待

近頃の学園では森についての話題で持ち切りだった。

同じ貌の首つり死体に練り歩く異形の怪物と下らない噂だ。

そんな喧騒から離れて人気のない場所でキミはある人物と対峙した。

キミを呼び出したカルペ・ディエム (*1) だった。

カルペ・ディエム：「よく来てくれたわね”オーダー”(*2)。無視されるかと思ってたけど」

佐藤：「やあ、久しぶりだね」正体は一応隠れるようなんやかんや (*3)

佐藤：「そちらこそ、なんの用かな？ 君からの用なんてもうないと思っていたけれど」

カルペ・ディエム：「いえね、ちょっと伝言を頼まれたのよ。あなたのセルからね」

カルペ・ディエム：「“戻って来ないか”ですって」

佐藤：「いやはや、実に過保護なこと…」

カルペ・ディエム：「あなたを結構買ってるみたいね。それとも親子のよしみかしら？」(*4)

佐藤：「さあね、私にはあの人の本音を見通せたことなんてないからその辺はわからないさ」

佐藤：「ただまあ…返答の伝言を頼むとしようか」

カルペ・ディエム：「あら、なんて？」とぼけた様子できく

佐藤：「『こちらの方が研究が捗ってますのでお気遣いなく』とでもよろしく頼むよ」(*5)

カルペ・ディエム：「ふふ、分かったわ。あと、ここから本題」

カルペ・ディエム：「私たちね、この島の遺産調査がかなり進んだの。それで、今の有力な候補地があるんだけど…知りたい？」

佐藤：「そりゃあ知りたいかと言われれば知りたいね。ただ、素直に教えてくれないか裏があるかどうか？」

カルペ・ディエム：「いいえ？私は現場主任がちょっと気に入らないだけ。変な要求はしないわ？」

佐藤：「ふうん…まあ、そういうことにしておくよ。遺産絡みとあらば蜘蛛の巣の中にでも飛び込むのが信条だしね」

カルペ・ディエム：「よかったわ。じゃあ、教えるわね。南西の森、今学園で噂になってる場所」

佐藤：「ああ…色々噂のあそこかい」

カルペ・ディエム：「そうよ。じゃあ伝えることは伝えたから私は帰るわね」

佐藤：「ああそうかい、じゃあさよならだ。こういう間柄でなければ茶でも飲めたらいいんだけどね」

カルペ・ディエム：「そうね…そうそう、あなたの伝言だけど…なんだったかしら…思い出せないから強がりを言っていたって伝えるわね…ふふふ」そのままキミの視界から姿を消す。

佐藤：「それで結構」

佐藤：「さてさて…鬼が出るか蛇が出るか、楽しみになってきたじゃないか」

佐藤：ちょっと上機嫌で報告しながら帰ります

ここで佐藤はスペリオルミックス(*6)を購入し侵蝕値上昇を抑えにかかった。

(*1)

ディスカロードレルムで紹介されているキャラクター。ディオゲネスクラブに所属。関係性は不明だがよく似た此花リリーというキャラクターも同時に紹介されている。

(*2)

佐藤 PL との相談の結果、オーダーの正体をディオゲネスクラブのメンバーは知らないことになった。

(*3)

原文ママ。仮面でも被っていたのだろう。

(*4)

七種：両親がセルリーダーのままなら普通に心配されてるのかな…

桐島：UGN 職員の子どもと FH エージェントの娘が一緒のクラスにいるのやべえな…

七種：バラエティ豊かすぎる…

佐藤：物凄いことだね…

雨宮：探せばいくらでも同じパターンありそうだ

(*5)

佐藤：ちなみに FH の仲間は指示に表面上は従っていても自分の都合優先する人が多い(本人含む)ので半分本気で研究進んでるところあります。

桐島：自己中ばっかな組織はダメだな…

雨宮：でも FH が他人の事考えてる連中ばっかでもアレだし…

(*6)

ディスカロードレルム記載のアカデミアでのみ購入できるアイテム。シーン登場による侵蝕値の上昇を抑える効果がある。

▽シーン2：不安

キミがもはや日課となっている人助けを終え空も暗くなったころ…

寮の自室の扉を開けると聞き慣れた声が聞き慣れない場所から聞こえてきた。(*7)

桜庭：「おかえりー、桐島くん。待ってたよ」合鍵でいつの間にか部屋にあがっていた(*8)

桐島：「ただいま。来てたのか清羅。待たせて悪いな」

桜庭：「いや、アンタん部屋だし、気にすんなよ」

桐島：「来てるんなら言ってくれたら早く帰ったぜ？」(*9)

桜庭：「別に急いでるわけじゃなかったから」

桐島：「ん、そか」

桜庭：「私の用ってのはさ、あの、アレ…何か最近七不思議とか流行ってるじゃん？」

桐島：「ああ……この時期になると毎年流行るんだよな」

桜庭：「そう、で、ああいうの桐島くんはどうなの？ホラーとか行ける？」

桐島：「いつもスプラッタみたいになってるからなあ俺。平気平気」

桜庭：「えー？本当ー？実は怖いとかないのー？」

桐島：「俺メンタル攻撃もあんまり効かない性質だしなあ…」

桜庭：「はぁ…肝試しで誘うつもりだったけどだめかな…」小さく呟く

桐島：「肝試し？」

桐島：「いいじゃん、七楽とかぜってーいい反応するぜ」

桜庭：「いや、あんまり人呼ぶと怖くなくなるから二人でとか考えてたんだけど…」

桐島：「なるほど確かに」

桐島：「そういう清羅は怖くねえの？怖かったら解決だ」

桜庭：「人の背中に隠れる桐島くんが見たかったていうか…いつもこっちがアンタの背中の後ろだから」

桐島：「あー……そういう。可愛げのない男ですまんね」

桜庭：「まあ、二人でってのはもう一つ理由があっさき」

桐島：「うん」

桜庭：「前に、私の経歴話したでしょ？」

桐島：「……聞いた」苦虫を噛み潰したような表情になる

桜庭：「それで、その中でマスター、"マスターアルカヌム"…私の育ての親の話をしたと思うんだけど…」

桜庭：「似てるんだ。噂の一つ、蠢く怪物、人や動物を繋ぎ合わせたような化け物が…」

桜庭：「マスターが作ってたものにね」

桐島：「来てるのか、ここに」きっと初めて清羅は啓一の表情に明確な敵意が芽生えているのに気づく

桜庭：「分からない…だから森に確かめに行く…他の人には私の話、あんまりしたくないから…」(*10)

桜庭：「一緒に来てくれない？」

桐島：「行く」

桜庭：「即答じゃん。ありがとう…じゃあ、待ち合わせね、外出届とか要るから」

桜庭：「来週土曜日の 21:00 でどう？」

桐島：「当然だ、俺は——、分かった。空けとく」

桜庭：「ん、じゃあ、私自分の部屋に戻るから」玄関へ向かう

桜庭：「あ…」

桐島：「どした？」

桜庭：「アンタあの冷蔵庫不健康すぎ！簡単な食べ物突っ込んだいたから。ついでに買い置きも。生傷ばっか作ってんだからせめて栄養はとれ！じゃあね」扉をボタンと閉めて出ていく

桐島：「サプリとか野菜ジュースで取ってるからセーフ！」(*11)

桐島：「……………必ず」

この後桐島は UGN ボディアーマー(*12)を購入した。

(*7)

七種：また自室凸されてるのか…

桐島：そういえば3話目にして初なんだよね

桐島：俺の部屋に凸するのがジャームじゃない OP

桐島は「Into the Storm」にて祝（似たようなものだったが実はジャームではない）に、「Renegade Circus」にてプラネータ（ディスカロードレルム記載の FHNPC）に自室に上がられている。

(*8)

前話にあたる「Renegade Circus」において桐島本人から合鍵を貰った。

(*9)

雨宮：なんだこいつら夫婦か？

桜庭 (GM)：ふふふ、夫婦じゃねーし！

桐島：やり取りが完全にそれ

佐藤：式場の予約しなきゃ…

このときは PLGM ともに大変呑気であった。

(*10)

リレーキャンペーン開始前の打ち合わせで桜庭の過去は桐島のみが知っているということになった。

(*11)

桐島：前回(清羅に)家事とかしにくるかもって言われたからこいつの私生活考えたんだけど

桐島：サプリとか野菜ジュースでビタミン取ってるからつってカップラーメンとカップ焼きそばずっと喰ってるタイプだと思う

GM：不健康すぎる…

七種：これから冷蔵庫に常備菜が勝手に増えてりする生活に…

雨宮：レタス食べてるし…… 体にいいものを食べてるよ(例の画像)

桐島：部屋は物がそんなに多くないから汚くはないけど週一でしか掃除機は掛けない

桐島：総じてズボラ！

(*12)ノーデメリットでハイパフォーマンスな優れものの防具。桐島は毎シナリオこの防具を購入している。

▽シーン3：臆病

キミがボランティア部が占拠している冷房設備もおざなりなボロ小屋で夏の暑さに苛まれていたとき(*13)、小さな少女、清羅の同室のソフィア・ホーエンハイムが小屋の扉をノックした。

ホーエンハイム：「あ、あの！ごめんくださーい！」

七種：「おお、今出る！」ドアを開けよう

ホーエンハイム：「あ、こ、こんにちは！七種さん！ここボランティア部であってますか？」

七種：「ああ、学園の吹き溜まりで間違いないが……そういう貴殿は」

七種：「……サーカスの時に顔を見たか？ 確か桜庭氏の……」記憶を手繰る

ホーエンハイム：「ソフィアです！清羅と同じ部屋で暮らしてます」

七種：「ああー思い出した！ ホーエンハイム殿だな！」

七種：「どうしたんだ、こんなところに来ると桜庭氏に叱られてしまいそうだが……」

ホーエンハイム：「お、覚えててくれたんですね…嬉しいです！」

ホーエンハイム：「そ、それでここで何でもお願い聞いてくれるって清羅が教えてくれたんですけど、ホ、ホントですか！？」

七種：「あ、ああ……何でもというか、まあそれなりにはな」

ホーエンハイム：「わ、私のお願いはた、大変ではないと思います！聞いてもらえませんか？」
低身長からの純真なまなざしによる上目遣い(*14)

七種：「う……」

七種：「……ま、任せておきたまえ！ この七種 七楽！」

七種：「桜庭氏の御学友であり、また年少の者からのお願いであれば」

七種：「高貴なる学徒として、全力を以って協力せねばなるまい！」

ホーエンハイム：「やった！じゃあね、七種さん、わ、私、臆病なの直したくて、そ、それで…」

ホーエンハイム：「い、今、七不思議とか皆怖がってるので、き、肝試しで強くなりたいんです！」

七種：「そうかそうか！ 克己心にあふれた願いで何より……肝試し？」

七種：「き、肝試しというと、その……」

七種：「……怖いところに行ったりする感じの？」おそろおそろ(*15)

ホーエンハイム：「よ、夜に森に行きます！」

七種：「……………」

七種：「い、い、いいだろう！ 任せておきたまえ！」

七種：「前言撤回などはしない！ この七楽、尽力を尽くそうではないか！」

七種：「……具体的には、何をすればいいのだろうか」

ホーエンハイム：「よ、夜中に森のなかを歩き回るだけです…お化けに遭えたら、つ、強くなれるかなって…」

七種：「そ、そうか……夜の森を歩くか……」

七種：「ええと、まず照明は大型トラック用のモノでいいかな……」

七種：「それから祝氏にオカルト対策グッズをもらっておかねば……プロパトール神父(*16)にも聖水をいただいしておくべきか」

七種：「おおそういえば部長が暑さ対策に作らせたミストシャワーがあったな！アレに詰めていざという時に備えよう！」

七種：「あとは……ぶつぶつ」と対策を練り始める(*17)

七種：「まあ大丈夫！余がいれば七不思議の一つや二つ！たとえ現れてもたちどころに退けて見せよう！」

ホーエンハイム：「じゃ、じゃあ来週の土曜日の 21 時でお願いします！人がいっぱいだと鍛えられないので七種さん一人に来て下さい！あ、あと清羅はからかってくるから秘密にしてください！」

七種：「土曜の 21 時だな、了解した！……うん、了解した」

ホーエンハイム：「ありがお、とうございます！」言いたいことを言ったのでさっさと帰る

七種：「気を付けて帰りたまえ！この辺には戦闘用きぐるみを来た不審者(*18)が出るからな！」

七種：「……さて」

七種：「夜に二人で森を歩くだとお……なんて恐ろしいことを依頼するんだ！」

七種：「だが引き受けた以上やるしかない……とりあえず対心霊形態を急いで実装せねば！」

七種：と妙な方向にやる気になりながら部室に戻る。

(*13)

GM：七種さんボランティア部っていつもどこでなにしています？

七種：高等部校舎の端にあるボロい小屋を部室として占拠しています

七種：概ねそこで部長を含めた数人がたむろしている感じ

七種：依頼があれば森に調達に行ったりしますが基本は風紀委員会などから隠れるために部室でぼんやりしてる連中

GM：大丈夫なのかその部活…

桐島：検挙！検挙！

七種：いつでも切り捨てられる便利屋みたいな扱いを想定してましたね…

佐藤：非正規協力者にしておいてよかった…！

(*14)

桐島：140cmVS……小等部女子でも越えてる子も全然いるな…

七種：マシンから降りたら普通に負けかねない…(七種の身長は 149cm)

GM：たぶん 130cm 行かないくらいかと…

七種：勝ったなフハハ

佐藤：ちんまいこんび！

(*15)

七種の settei には「本来は卑屈かつ臆病」とある。

(*16)

ディスカロードレム記載の NPC。島内の神父。

(*17)

雨宮：初等部と夜の森で二人で…？

桐島：やべーぞ！未成年略取だ！

佐藤：高校生はアウトなんだっけ…？

GM：ぎりぎり少年法？

(*18)

雨宮：なんだその不審者…

桐島：戦闘用着ぐるみは強いからな…

佐藤：部長殿…？

GM：不審者呼ばわりされる部長…

七種：だってあんなの不審者とはか思えないし…声変えてるし…

ボランティア部の部長、函辺は「Into the Storm」に登場した。

▽シーン4：配役

今日は数理部の定期ミーティングの日だ。キミがおそらく数瞬違わずいつもどおりの時間に部室へ来ると珍しいことにいつもあなたより早く来る面子がそろっておらず、そこに居たのはいつもは遅く来る犬走遊ただ一人であった。（*19）

雨宮：「……おや。私とした事が… まあ一番最初じゃないなら良いか」

雨宮：「やあ犬走さん」

犬走：「こんにちは…雨宮さん…」 そっけない返事をする（*20）

犬走：「二人…きりね…」

雨宮：「そうだねえ。まあ私の個人的な感想を言わせて貰えるならば男子と一緒にいる時にそれが言えたら良いのではないかと思うが」

犬走：「相変わらず早口ね…男子とかどうでもいい…」

犬走：「まあ、丁度いいわ…」

犬走：「あなたに質問がある…"難問"ではないから、身構えないでね…」

雨宮：「ふむ。私に答えられる事であれば」

雨宮：「“純血種(ピュアブリード)”と言ってもノイマンの頭の出来はそこでは決まらないからね」

犬走：「そう？あなたはこの部のなかでも賢い方だと思うわ…」

犬走：「じゃあ、質問…」

犬走：「名前さえないエキストラ、それが急に主役が降りて、代役になったとしたら…どんな気分で舞台上がるのでしょうか？」

雨宮：「状況にもよるとは思うが……少なくとも」

雨宮：「歓迎されてその位置に立ったのであれば。その人物は運命にそう導かれたのだろう」

雨宮：「であれば、その人物の“元エキストラ”というのは仮初の称号にすぎないのではないかな。降りた主役はそういう役割を背負って降り、代役は本質的には“代役”ではない、と」

雨宮：「初めからそう定まっていたのだと思うよ」

犬走：「そう…どんな気分かって尋ねたのに…あなたはそう答えるのね…」

雨宮：「だって私は“気分”なんてあまり考慮したことがないからね」

雨宮：「役割というのは“そうあれかし”と定められた者で、演者はすべからくそういうものだ」と割り切って演じるものだと思うから」

犬走：「へえ…窮屈ね…そういうの…」

犬走：「ありがとう、参考になったわ」

雨宮：「うん。まあこういう哲学的な話をここでするのはお門違いだっただろうかな、確かに」

雨宮：「もっとも哲学もまた人類に課せられた難題ではあるとは思うけど」

犬走：「そうね…ところでこれはまた関係のない話だけれど…」

犬走：「同じ貌の死体が森にあるそうね…」

犬走：「興味は…ない…？」

雨宮：「都市伝説…いや七不思議ってやつかい？」
犬走：「そう…皆、同じ姿の死体…皆、同じ役…」
雨宮：「従者あたりの間違いとかではなく？」
犬走：「そうだったらつまらないね…彼女たちは何で死んだんだろう…誰の人生を生きていたんだろう…」
雨宮：「ふむ……」
雨宮：「興味がないと言えばウソになるが…一緒に調べてほしいという事かな？」
犬走：「聞くだけのつもりだったけれどそうしてくれるなら嬉しいわ…」心底驚いた表情をしている(*21)
雨宮：「何、見ず知らずの人間の為に文字通り身を捧げる人間の事を思い出してね」
雨宮：「ただし、調査の主体があくまで君で、私は補助という事であればだが」
犬走：「ええ、こき使うような真似はしない…いつにしましょうか？」
犬走：「私が動けるのは直近だと来週の土曜日ね…」
雨宮：「ではそれで。噂の内容的に夜の方が好ましいかな？」
犬走：「そうね、夕方にご飯を食べて、シャワーを浴びて…21時頃でどうかしら？」
雨宮：「いいよ。……」
雨宮：「その包帯ってシャワーの度に巻き直してるのかい？」
犬走：「日によってさえ場所が変わるわ…気にしていないでしょうけど」
犬走：「まあ、YESね、この場合」
雨宮：「そうだったのかい。まあ、そういう事に気づくのは私の役割ではあるまい」
犬走：「さて…久々に口を開いたら疲れちゃった…今日のミーティングは欠席する…」と言って部室を出ていく
犬走：「じゃあ、また…」
雨宮：「おお、そうかい。まあ他にもそういうヤツ居るしそういうもんかな…ではね」
雨宮：「……おや“欠けたる弾丸”、こちらに顔を出すのは珍しいね、では——」とかなんとか、入れ替わるように来た少女に話しかけたり

(*19)

GM：数理部って部室とか定期ミーティングとかありますか？
雨宮：部室はあると思います 定期ミーティングはどうだろう まあ規律保つためであつてもいいとは思ふ
雨宮：アカデミアのノイマンとか自由人多そうでしたまには集まる日があつてもよかんべみたいな
桐島：やっとなまともな部活が出て来た

GM:では定期ミーティングの日で雨宮さんは時間に早くくるほうとか遅くくるほうとかありますか？

雨宮:全出席者の中で中ぐらいに来るだろうね

ちなみに数理部とは雨宮の settei によると「ノイマンのみが所属する、『この世のありとあらゆる“難問(学問的な意味で)”を越える難問を自分たちの手で作り出す』集まり(名目上、「数理部」となっていますが、「難問」は数学・理科に限られません)」であるらしい。

(*20)

佐藤:この病み子さんは果たしてどれくらい病んでるのか…

桐島:すんげー包帯

立ち絵は包帯だらけだった。

(*21)

桐島:夜に出歩く不良がどんどん生えて来る

佐藤:4組の放浪者が一堂に会する

桐島:俺と清羅は申請取ってるので正規ですー！

桐島:いやまあ俺も清羅と一緒にじゃなかったら絶対取ってないな

佐藤:こっちだって調査の許可貰って正式に探索してるぜー！

ちなみに GM は犬走に森の死体の話をさせたらそのまま退場させるつもりだったが、これまでの流れからか先手で誘われてしまい、予定外のトリプルブッキングが発生したため犬走は若干メタな反応を返してしまった。

■ミドルフェイズ

▽シーン5：邂逅

キミたちが待ち合わせの時間にあるいは調査へと森へ赴くとそこに清羅、ソフィア、遊の姿はなく変わりにキミたちの姿があった…(*22)

桐島：「おー、奇遇だな」(*23)

七種：「え、あれ、えええっ!？」

雨宮：「おや？ 男二人で肝試しかい？」

雨宮：「まあ趣味は否定はしないけど…」

佐藤：「おやまあ皆々お揃いで」

桐島：「だーれが男と二人きりでこんなところ来るかよ」

雨宮：「あ、董も居たのか」

七種：「どうしてこんな怖い……いや、寂しい場所に桐島氏と来なけりゃならんのだ!」

七種：「そ、それより皆聞きたいのだが……ホーエンハイム殿を見なかったか!？」

桐島：「ソフィア？ お前あんな子どもを連れまわそうとしてんのか」

雨宮：「ホーエンハイム…ソフィアかい？ いや見なかったと思うが」

佐藤：「こんなところに連れこむのは感心しないね？」

七種：「逆だ逆! あの娘に連れまわされそうだったのだよ!」

雨宮：「えっそうなのかい？ その趣味はさすがに否定しないとマズいのだけど」

桐島：「止めるよ」

七種：「そうは言うが依頼だったから……合流してさっさと帰らせるつもりだったんだ!」

七種：「しかし見つからないとなるとマズいな……遅れているだけだといいたが」

桐島：「口ではそうは言ってるけどせがまれて森に入ってくやつだよなそれ」

雨宮：「おいおいまさか迷子かい？ シャレにならないぞ」

とここで遅れて犬走が現れた。

犬走：「思ったより私、メイクに時間かけてた…ごめん雨宮さん…」

雨宮：「(するんだ…?) 私の事だし全然かまわないよ」

犬走：「誘ったのは私だから…」

犬走：「ところでなんでこんな大所帯なの…？」

雨宮：「ととこでかなり人が居るようだけど…って君が呼んだわけでもないのかい」

雨宮：「ああそうだ、初等部の少女を見なかったかい？」

犬走：「いえ？ こんな夜中に出歩くものかしら…」

雨宮：「まあそうだろうね…ありがとう」(*24)

七種：「ああ、本当にマズい。もう少し待って合流できなかつたらベアトリス氏に報告しようかと思う」

佐藤：「今は特に状況が悪いみたいだから少し焦った方がいいかもしれないね」

そしてここで桐島が桜庭にメール等が来ていないか確認したが何も連絡がないことがGMより伝えられた。

桐島：しきり貧乏ゆすりして頭搔き散らした後

桐島：「七楽」

七種：「む」

桐島：「今から森入って探して来るわ。ソフィアが遅れて来るならすぐ引き返してくるから影の中に俺の影を潜ませてくれ」

桐島：「今から森入って探して来るわ。ソフィアが遅れて来るならすぐ引き返してくるから影の中に俺の影を潜ませてくれ」

桐島が森に入ろうとしたところ前方から何かがぶつかって来た。

雨宮：「おいおい、そういう事なら全員で——」

七種：「影の件は了解したが……桐島氏も気を付けて……」

桐島：「いや、これは俺と——うおっ！」

ホーエンハイム：「あう！」尻もちをついて倒れる

桐島：「ソフィア！？」

雨宮：「おっと……おてんば姫のご登場か」

七種：「ホーエンハイム氏!!」

桐島：「すまん、大丈夫だったか？」

桐島：手を出して引っ張り上げよう

ホーエンハイム：「あ、き、桐島さん、ありがとうございます…」

佐藤：「おやまあ」

桐島：「……七楽と約束してたんだって？お前ひとりで行っちゃうもんだから泣きべそかいてたぞ」

七種：「かいとらんわ！」

雨宮：「こんな夜中に出歩くのは感心しないな」

ホーエンハイム：「あれ？七種さんだけって言ったよね？」じと一っと七種をみつめる

七種：「それがこちらも想定外なのだよ……彼らとはここで偶然カチあったのだ」

ホーエンハイム：「そ、そうなんですわね…」

雨宮：「ましてや思春期の男子など基本的に獣だぞ」

七種：「違うってば！」一人で焦ろう

雨宮：「基本的に頭の中は繁殖欲で埋まってるを見ていい」

桐島：「お前の男へのイメージもそれはそれで偏ってねえ？」

ホーエンハイム：「あ、雨宮さんは何の話してるんですか？」誰にともなく尋ねる

桐島：「……まだ知らなくていい」

犬走：「探してのこの子？」

桐島：「七楽はな……誰？」

雨宮：「ああうん、ありがとう」
七種：「ぎゃああ! ……あ、知り合いか……」
雨宮：「ああ紹介するよ、こちら我が自慢の数理部の犬走くん」
桐島：「桐島啓一。よろしく」
犬走：「犬走 遊…数理部で雨宮さんにお世話? になってる…」
雨宮：「あと七楽あとで謝りなさい」
七種：「す、すまない……いろいろ動転していて……」
佐藤：「なんだい関係者同伴ばかりで一人向かわされた自分が寂しいじゃないか」
犬走：「仲がよさそうね…」
桐島：「なんだかんだ結構つるんでるしな」
雨宮：「まあそれなりにはね」
ホーエンハイム：「あの、あの…」
七種：「向かわされたって……佐藤氏も誰ぞの依頼でここへ?」
佐藤：「ちょっと人伝の人伝なだけだよ」
ホーエンハイム：「えと…」
雨宮：「はいソフィアさん早かった」
桐島：「よし、じゃ俺森行くから。ソフィアちゃんと連れ帰ってやれよ七楽……どうした?」
ホーエンハイム：「はい! お、お喋りしちゃったけど大事な話があったんです!」
ホーエンハイム：「せ、清羅が森に消えちゃいました!」
雨宮：「はあ?」
桐島：「森に向って走り出します」
七種：「ま、待て桐島氏!」 (*25)
七種：「気持ちはわかるが情報を聞いてからの方が効率がいい……くっそ早いな!」 (*26)
ホーエンハイム：「えと、先に来てて清羅と会ったんだけど…私が寝てる間にいなくなっちゃたの…」
ホーエンハイム：「あ、あれ? 桐島さん!」
雨宮：「ゴー! 遊ゴー!」
犬走：「え、あ、分かった? って危ない…」
犬走：「なんなのあの人…」
雨宮：「だって私モヤシだから…って逃がしたか…」
七種：「……ホーエンハイム殿、とりあえず続きを」
七種：「桐島氏はアレで一人でも割とどうにかなるタイプだ。心配ではあるがな」
七種：「情報は……聞いたら携帯にかけよう」
佐藤：「彼ならまあ死体が増えることにはならないだろうからまあいいか」
ホーエンハイム：「う、うん…起きたら清羅が森に入るのが見えて…一緒に入ったんだっけな…寝ぼけててよく覚えてないけど…」

ホーエンハイム：「気になってついていったら清羅が見えなくなったんです…」

雨宮：「うーん、状況的には単にはぐれただけに聞こえるがね」

ホーエンハイム：「一人になって怖くなったから走って戻ってきたの…」

佐藤：「よくまあ無事に戻れたものだね」

七種：「よしよし、戻ってきただけ偉いぞ」

ホーエンハイム：「でも、清羅、桐島さんが来るまで待ってたから変だなんて思ったんです…」

七種：「……あの二人、こんな時間にここで会う予定だったのか？」

雨宮：「それはキミも人の事言えないのでは？」

七種：「余にはちゃんとした言い訳……じゃない、依頼があるからな!」

七種：「だが……確かに妙だな。どちらも積極的に約束を破るタイプではないはずだし……」

ホーエンハイム：「"アンタも肝試しか"っていったので肝試しに来たんだと思います…」

雨宮：「ん？待ちたまえ。 啓一がそう言った？」

ホーエンハイム：「あ、せ、清羅に言われました。寝ちゃうまで一緒にいたので…」

七種：「ふーむ……桜庭氏が約束を破らざるを得ない何かを、森の中に見つけたのか」

雨宮：「ふむう…」

佐藤：「ふうん…」

雨宮：「ところで……」

雨宮：「董に聞きたいのだがこの森は危険なのかい？」

佐藤：「まあ、詳しい話までは知らないけどね…遺産が関係しているらしいよ？」

雨宮：「……オーケー、それを聞きたかった」

雨宮：「どうやら…概ね厄ネタという事で間違いなさそうだね」

七種：「……なんともマズい状況だな」

七種：「ホーエンハイム殿、ほかに何かなければ寮まで余が送ろう」

七種：「残念ながら……今夜は肝試しに向かない夜になりそうだしな」

ホーエンハイム：「いやです、清羅をほっとけません」意志は固そうだ

雨宮：「遊はどうする？ 私としては手伝ってもらえるとありがたいがね」

犬走：「そうね…用事に付き合ってもらってる身だもの…当然…」

雨宮：「無理強いはできないが——助かるよ」

この後に佐藤がすごい服(*27)を桐島がジュラルミンシールド(*28)を購入。PCの防備が整っていった。

(*22)

当初の予定では桐島と七種のみが鉢合わせ雨宮と佐藤は後にソフィアが頼れる人物として

呼び出すつもりであった。

(*23)

桐島：ある程度事情知ってる俺は内心めちゃくちゃ焦るなこれ…

桐島：お喋りせずに森に入って行きてえ！

(*24)

雨宮：これ別に遊の姿他の PC にも見えてますよね？

GM：見えてますよ 声が小さいので気付れにくいですが

(*25)

桐島：無視！

(*26)

七種：七楽はソフィアを置いていけないので追わない！

(*27)

すごい。とにかくすごい。

(*28)

そこそこのガード値を誇る盾。種別は白兵武器。

▽シーン6：足跡（情報収集）

清羅を探してあるいはほかに目的があつてかキミたちは森に足を踏み入れる。

そして各自の情報収集が始まった。

まずは桐島が財産点を7点使い森の入り口周辺を調べ上げた。

・森の入り口周辺 <知覚>6、8、11

最近できたらしい足跡がいくつかある。大半は怖いもの知らずな学園生のものだが、子供のものも混じっている。さらに異質な点としてなにかで抉ったような跡が足跡のように続いている。

達成値8 子供の足跡のほとんどは同じ人間のものと見られる。

達成値11 子どもの足跡は大きさや歩幅がソフィアのものに酷似している。

続いて佐藤が森の西を捜査した。

・森の西 <知識：遺産>5

地面から古い墓らしきものが露出している場所がある。墓にはミイラ化した人間の遺体のみがあり副葬品の類は持ち去られたようだ。おそらくディオゲネスクラブだろう。

最後に雨宮が森の東へと向かった。

・森の東 <RC>7

奇妙な死体が積み上がっている。全身が砂でできたヒトガタ、体は何らかの結晶で覆われているもの、複数の人間を縫い合わせたようなもの、獣と人を繋ぎ合わせたようなものと様々である。おそらくジャームだ。(*29)

ホーエンハイム：「キャッ！なにこれ…」

ホーエンハイム：「醜い…」

七種：さっとホーエンハイム殿に目隠ししよう 間に合っていないけど

ホーエンハイム：「うわっ！暗い！」

雨宮：「いやはや……肝試しと言ったらコンニャク程度でいいだろう。これでは猟奇ホラーだよ」

七種：「あまりじっくりと見るようなものではないよ、アレは……」

犬走：「今年の七不思議…荒唐無稽ってわけじゃないのかしら…」

佐藤：「規則性は特にないのかな…？」

七種：「アレがいつ行われたモノかはわからんが、とにかくもう森の探索などと言っている場合ではないぞ」

七種：「桐島氏と桜庭氏を見つけたら、風紀委員会と生徒会に報告しなくては……」まあ森からは出られないんだが

雨宮：「しかし啓一見つからないなあ…？」(*30)

ここで桐島がUGN ボディアーマーを購入しようとしたが失敗、しかし佐藤がフォローす

るように UGN ボディアーマーの購入に成功した。

(*29)

桐島：やべーぞキメラだ

七種：思った以上にろくでもねえ!

桐島：子どもに見せるもんじゃないすぎる

(*30)

桐島：(まだらの紐で七楽の影から状況を見つつ)

桐島：「錬金術…昔漫画で見たようなツギハギ生物…」

桐島：「クソッ…俺一人で向かったって何もなりゃしないってのに！」

桐島：七楽達は既にもう森に入って来てる あいつらが清羅を見つけたら説明は必要になるだろう

桐島：防がなければ――

▽シーン7：歩武

キミたちが森を歩き回っていると犬走遊が七種に対して話しかけてきた。

犬走：「ねえ…あなた…面白いものを扱っているわね…」機械というよりかは七種の身体に興味を示す

七種：「うわぁ! ……あ、いや、失礼」

七種：「そ、そうか……? まあブラックドッグのはしくれだからな、これでも」

犬走：「どうしたの? 驚いて…私よ?」

七種：「こうも周りが暗いと誰が話しかけてきても怖いんだ……」(*31)

佐藤：「ちと臆病すぎないかい」

雨宮：「七楽……だから驚くのは失礼だという認識はないのかね」

七種：「すまない……本当にすまない……」

犬走：「いい…気にしてない…雨宮さんはちょっとトゲのあるからかい方をするから…」

雨宮：「バカを言いたまえ私のは愛情表現の一種だ、だが顔を見て驚くというのはちと違うだろう」

犬走：「ブラックドッグの端くれ…あなたは望んでそうなったの…?」

七種：「まさか! 望んでいたならもっと格好いい感じのにするさ」

七種：「たとえばキュマイラみたいな……強くて、自分ひとりでもガツンと戦えるタイプのな」

犬走：「そう…でも、私はいいと思うわ…あなたは一人で歩いている…自由に…」

犬走：「それが機械の補助だとしても…自ら考え、動いている…」

七種：「……そう言ってくれる人がいるだけで、随分と助けになるよ」

犬走：「ええ、あなたはきっと誰かが羨むほどに自由よ…」

七種：ああ、電力が尽きるまでは、だがな!」

七種：「それさえ克服できればなあ……しかしこれ以上のバッテリー増設は稼働に問題が……」

犬走：「ふふ、そうやって考えこんでいたら怖さも紛れるかしら…?」

七種：「うっ……そういえばコワイ状況なんだった!」

七種：「……しかしビビっているわけにもいかんな。とにかく桜庭氏と」

七種：「あと桐島氏も見つけなきゃ!」とあたりを見回しておこう

佐藤：「いやはやどこまで駆けて行ったんだろうね」(*32)

雨宮：「ブラックドッグのパートナーを見つけたまえ、できればRC使いの」

雨宮：「あとできれば……あー、15歳以上の女子を」

犬走：「じゃあ、立候補してみようかしら…」からかうように笑う

七種：「えっ、いやその!」

七種：「ば、パートナーとはそういうのじゃないだろう! もっとこう……」露骨に焦る

犬走：「ふふ、面白い反応…」グイッと距離をつめて目を見つめてみよう

七種：「お、あ、ええと、その、あの……」

佐藤：「はいはいそのへんでね」

七種：「そ、そ、そうそう桐島氏! ウワー桐島氏探さないとお!」

七種：「余は向こう見てくるから! あ、あまり離れないように! ジャあ!」

七種：と距離を取ってそっぽ向いておこう

犬走：「ふふふ、あはは!」大笑いしている(*33)

(*31)

桐島：2回目だぞ七楽

桐島：ライトくらいその機械についてないのか七楽!

七種：それはそれ! これはこれ!

(*32)

桐島：分からない…俺は雰囲気夜の森を走っている…

桐島：典型的な二次遭難者だな

七種：まだらの紐でつながっているから許すが…

(*33)

桐島：七楽に春を届けてやってくれ…

雨宮：でもこの子このシナリオのボスじゃない?

七種：ヤダー!

七種：ロイスとっここ…

▽シーン 8：羨望

七種が歩を進め犬走遊も進みキミたちから少し距離が空いた。

犬走：「14号…羨ましい…」 その眩きを耳にするものはいない

▽シーン9：再会

キミたちが清羅の行方を掴めず森の奥へと進んでいくと不意に轟音が響いた。

雨宮：「オワ？」

七種：「な、何事だ!？」 ホーエンハイム殿をかばう構え

ここで全員<回避>5の判定を行い、雨宮と佐藤が仲良くファンブルして2点のダメージを受けるも装甲によって無効化、他は回避に成功した。(*34)

桐島：「——！」音と飛来物の方向に駆けだそう

佐藤：「今のはあっちの方だったかな？」

音の正体は雷だった。それも空から落ちてきたのではなくキミたちの正面から飛んできた。

雨宮：「いだっ！首の後ろがちょっと焼けた…」

七種：「何……いや、誰だ!？」 ウワーッ!

キミたちの前に多脚戦車が姿を現した。

同時にゾンビのような不可思議な生物たちがキミたちに群がった。(*35)

雨宮：「戦車と…ゾンビ？ 何？」

雨宮：「クソ映画の匂いがする！」

桐島：「清——クソ、ハズレかよ！」合流

佐藤：「数だけは無駄にいるようだけれど」

七種：「ッ…！あの多脚戦車……まさか……」

桜庭：「チッ、無粋な真似しやがって…」

それだけではない…さらにキミたちの見知った人物が来た…だが…

桐島：「あ！いた！清羅！」

七種：「桐島氏！無事か……あっ桜庭氏も!？」

彼女は仮面を被っていた。

桐島：「そうか……やっぱりな……」

佐藤：「ふーん」

雨宮：「……おいおい」

七種：「……冗談だろう」

桐島：「離れちゃいけなかった……一緒にいるべきだった……」

桜庭：「皆、勢ぞろいか…いいね、一回やり合って見たかったんだ。戦おうぜ！」今の彼女は衝動に吞まれている

七種：「ヤバい展開だが……だが最悪ではない！"仮面"なら破壊すればまだ取り返しがつくッ!」

桐島：「……………」

佐藤：「まあ何に付け込まれたかは知らないけれど別に死んだわけじゃないならいいんじゃないの」

雨宮：「……頼むから余計な事は言わないでくれたまえよ」

雨宮：「忘れられないのだから、私は」

桐島：「お前には、こいつらを傷つけさせない」

桐島：「戻ったら、悲しむだろうからな。優しいから」

桐島：「いつか言ったな……収まらないなら俺を殴れって」

(*34)

雨宮：1dx 無理では？

DoubleCross：(1DX10) → 1[1] → 0 (ファンブル)

佐藤：(1+0)dx@(10) 【肉体】判定

DoubleCross：(1DX10) → 1[1] → 0 (ファンブル)

桐島：ええ…

雨宮：ひでえ

GM：1て…

佐藤：わあい

(*35)

多脚戦車は HR に記載されている FH アイテム「オルトロス」の改良型という設定。RC 判定にボーナスがつくヴィークル。使用には同じく FH アイテム「精神強化手術」が必要。ゾンビは情報収集中に見た遺体と同様のものが 5 グループ居た。データは上級記載の EX ジャーム：死者と同一のもの。

◆戦闘

この時点での侵蝕率と行動値と HP

雨宮 54% 8 HP28

桐島 62% 10 HP25

佐藤 47% 22 HP24

七種 67% 7 HP29

オルトロス EX 109% 22 HP92

桜庭 85% 13 HP23

蠢く怪物 100% 5 HP25

エンゲージは PC たちからオルトロス EX (多脚戦車)・蠢く怪物 (ゾンビ) *5 までが 5m、PC たちから桜庭までが 8m であった。

1 ラウンド目

▼セットアップ

七種がクロックフィールドで全 PC の行動力を+5 して侵食率が 71%に、雨宮が常勝の天才で雨宮以外の PC の攻撃力を+28 して 60%に、エネミーの桜庭が怨念の呪石で暴走を得て桜庭のダメージに+2D した。

▼行動値 27 佐藤

▽メジャーアクション

佐藤：【命ず】：コンセントレイト：ソラリス+絶対の恐怖+彫像の声+風の渡し手 6(7)体対象 (侵蝕値 11)

佐藤：怪物 1 体だけ除いて他全部に

佐藤：(5+2+0)dx+10+1+2@(8) 判定/100%未満/命ず、動くな

(7DX8+13) → 10[1,3,4,5,8,9,10]+6[2,3,6]+13 → 29

蠢く怪物はイベイジョンにより回避値は 12、桜庭は暴走のデメリットによりリアクションが行えず攻撃は命中、オルトロス EX も素のクリティカルにより達成値 18 をだしたが難なく命中した。

佐藤：3d10+21+28 ダメージ/100%未満/命ず、動くな 装甲値無視。命中した場合、シーン中対象の【行動値】-15。マイナーアクションで解除可能。

(3D10+21+28) → 19[10,2,7]+21+28 → 68

佐藤：「さて…まずは少しだけ、じっとしてしてくれるかな？」

蠢く怪物は 1 体を除き壊滅、オルトロス EX は HP が残り 24 点に、桜庭は戦闘不能になるも《リザレクト》を使用し、HP3 点で復帰する。

桜庭：「まだ一発も撃ってない！」痛みに耐えて立ち上がる

侵蝕率は 88%へ上昇した。

佐藤：バフを付与 彫像の声/【行動値】-15/1R > [オルトロス EX][桜庭 清羅]

これによりオルトロス EX の【行動値】は 22→7 へ、桜庭は 0 となった。強力なデバフだ

った。

メインプロセスが終了し、佐藤の侵蝕率は 58% となった。

▼行動値 15 桐島(*36)

そして GM は桐島へと手番を渡すが桐島は待機を選択した。

▼行動値 13 雨宮

▽メジャーアクション

雨宮：コンボ：六月の雨（《雨粒の矢》+《マインドエンハンス》+《虚構のナイフ》）で敵全員に攻撃します

桐島：Auto:A ランクサポーター ダイス+2 個:自分対象不可:浸食値+2

桐島の侵蝕率は 64% へ。

雨宮：11dx9+6 かたじけない

(11DX9+6) → 10[1,1,2,3,3,6,7,7,9,10,10]+8[2,3,8]+6 → 24

残った蠢く怪物、桜庭、オルトロス EX の全てに命中した。

雨宮：3d10+17 装甲ガード有効

(3D10+17) → 19[6,4,9]+17 → 36

オルトロス EX は実は存在した装甲 15 点により残り HP3 点で耐えた。桜庭は戦闘不能となりまたもやりザレクトで HP6 点、侵蝕率 94% で復帰した。最後の蠢く怪物は倒れた。

雨宮：「しかしカッコつけてはみたもののこういういかにも硬い奴とか苦手なんだよねえ…！」細かい氷の針の雨が降り注ぐが…ガキングキという音で弾かれるのがわかる

雨宮：「そして……ああ、ハッキリ言ってよくない気分だね、実に」

桜庭：「ぐっ…！この雨こんな痛かったのか。血が騒いできた…！」アドレナリン全開でたち続ける

そして雨宮の侵蝕率は 65% となった。

▼行動値 12 七種

▽マイナーアクション

オルトロス EX のエンゲージに侵入し…

▽メジャーアクション

七種：「オル……トロス……」

七種：「お前さえいなければ、ぼくは……ッ！」

七種：対象オルトロスで巨匠の記憶いきます

七種：(4+1+2+0)dx+6@7 【ティタノ・マキア】《巨匠の記憶+コンセントイレイト》メジャー/運転:多脚戦車/対決/単体/武器(至近)/4

(7DX7+6) → 10[4,6,6,7,9,9,10]+4[1,3,3,4]+6 → 20

下ぶれたもののオルトロス EX は回避に失敗し攻撃は命中した。

七種：では常勝の天才が載って装甲有効の

七種：3d10+17+28 【ティタノ・マキア】ダメージ/装甲有効

(3D10+17+28) → 13[1,4,8]+17+28 → 58

オルトロス EX の残り 3 点の HP にオーバーキルとなるダメージを与えて戦闘不能へと至らせた。

七種：普段の高笑いもせず、ひたすら壊すかのように殴りまくる。

しかし、オルトロス EX は機体を破壊されつくされる前に《瞬間退場》によって逃走した。

雨宮：「なんだとお…」

桜庭：「チッ！冷やかしかよ！」

佐藤：帰れ帰れ！

七種：「くそっ……まだ、壊せていないのに……！」

七種の侵蝕率は 75% となった。

▼行動値 0 桜庭

▽マイナーアクション

桜庭：【鸞&和】：ハンドレッドガンズ+ダブルクリエイト 侵蝕値 8

▽メジャーアクション

佐藤を対象に取り攻撃を行う。

桜庭：(6+3)dx+10@7 【波旬繆砂龍】 100% コンセントレイト+マルチウェポン+ブルータルウェポン 侵蝕値 9(*37)

(9DX7+10) → 10[1,2,4,4,4,5,6,6,9]+10[10]+10[7]+4[4]+10 → 44

佐藤：(1+0)dx@(10) 【肉体】判定 とりあえずドッジ

(1DX10) → 8[8] → 8

桜庭：「目には目を歯には歯を！ぶっぱなして来た順に撃つ！」

佐藤：「まあ殴られるのには慣れているからお好きにどうぞ？」

桜庭：(4+1+2+1)d10+32+9

(8D10+32+9) → 51[2,6,5,8,10,10,1,9]+32+9 → 92

佐藤：リザレクト！

佐藤：1d10 リザレクト

(1D10) → 4

佐藤：[侵蝕率現在値]変更[+4]>[佐藤 董 58>62]

桜庭：「私の一撃は痛いぞ！倍返しだ！」

桐島：「……あ！すまん董、見逃した」

佐藤：「なに、別にこれ位気に留める必要はないさ」

佐藤：「たいそうな威力ではあるが…まあ、私なんか相手にするには過剰威力ともいえるね」

桜庭：「おかしいな？半身ぐらい千切るつもりだったのに…」

▼待機 桐島

▽マイナーアクション

桐島は桜庭へとエンゲージする。

▽メジャーアクション

桐島：メジャー 白兵/武器：素手 対象：清羅

桐島：2dx 肉体

(2DX10) → 8[6,8] → 8

暴走している桜庭には当然命中。

桐島：1d10+28-5 装甲無効

(1D10+28-5) → 2[2]+28-5 → 25

(*36)

このとき GM は行動値を読み間違えて雨宮の手番を桐島の手番より先に行ってしまった。

(*37)

ちなみにここで GM はルール運用を間違えており、メインプロセスの終了時に侵蝕率が上昇するところエフェクトの使用時に上昇させてしまっており、侵蝕率が 100%未満としなければならないところを 100%以上として計算してしまっている。

▽シーン9 アフター

桐島：「ごめん」抱きしめて締め上げます

桐島：「ごめん、弱くて」

桜庭：「何…桐島くん…？あがっ…」体力に限界が来たのか気絶します

桐島：そっと仮面を取ります

桐島：「……誰かこれ壊しておいてくれ」仮面を皆の方向に投げます

佐藤：「はいよ」

佐藤：「それで、特に影響はなさそうかい？」適当に調べてしまい込みつつ

桜庭：穏やかに寝息を立てている

桐島：「分かんね…俺医者じゃないし…でもまあ、ジャーム化したりはないかな」

桐島：抱きしめたまま木に寄りかかって座る

桐島：「一緒に行きゃあ良かった…待ち合わせなんかせずに…」(*38)

七種：「……桐島氏、君と桜庭氏だけでも先に戻るか」

佐藤：「まあ、後悔なんて後にするから後悔ってものだね」

桐島：「全くだな」

佐藤：「そんなことを考えるよりこれからどうするんだい？」

桐島：「……清羅が眠ってる間に全部終わらせられるなら、それはそれで都合がいいんだ」

七種：「なら、仮面を付けさせた犯人捜しだな」

桐島：「そいつについては分かってる」

桐島：「顔とかは知らねえけど…」

ホーエンハイム：「あ、あの、なにがあったんですか？」犬走遊とともに別行動をとっていたソフィアが尋ねる

雨宮：「ああソフィア。なに、ちょっとB級映画に巻き込まれてね」

桐島：「清羅を見つけたよ。ほら」寝てる清羅を見せよう

犬走：「探していた人…？」

桐島：「ああ」

ホーエンハイム：「よかった。見つかったんですね…眠ってるの？清羅？」清羅に近づく

桐島：「ああ、ぐっすりな」

七種：「おっと、まだレネゲイドの暴走があるかも……まあ大丈夫だろうが」と一応ソフィアの横に移動しよう

桐島：「しっかり抱きしめてるから急に動き出しても大丈夫だとは思うが」

ホーエンハイム：「あれ、ジャケットの裏になにか大きいのが…」そうやって清羅のジャケットからタブレットを取り出した。FHのエンブレムがついている。清羅の私物ではなさそうだ。

佐藤：「ふうん？」

犬走：「ん？彼女はFHなの…？」

桐島：「元だ！」

桐島：「なりたくてなったわけでもない！」

雨宮：「あーあーあー」

雨宮：「私向こう行ってていいかい？」

犬走：「え…あ、そう…ごめんなさい…」 大声をだした桐島に面食らったように驚き訳も分からず謝る

桐島：「……いや、すまん。急に大声出して」

犬走：「雨宮さん？」

犬走：「い、いえ…私も失礼だったわ…お友達が FH かなんて…」

佐藤：「まあそれよりこれをどうするかだけど」 タブレットの様子から中身まで調べられるかな

桐島：「……そうだな。わざわざ持たせたんだ。居場所の手がかりとかはあるかもしれん」
タブレットにはロックがかかっており、調べるには時間が必要だった。というわけで戦闘は終了し、佐藤、桐島の両名が応急手当キットを購入、即座に使用して佐藤の HP が全快したところで2回目の情報収集へ。

(*38)

桜庭：同じ寮なのになぜ私は現地で待ち合わせたのだろうか…

七種：デートは待ち合わせの時間も楽しいらしいからな…

佐藤：なんか「桐島です。用事があるので先に行っておいてください」的な手紙が刺さってたとか…

後に考えた結果おそらく桜庭は男女 2 人きりで夜中に寮を堂々と抜け出すことで目立つことを避けたかったのだろう。うに

▽シーン 10：正体(情報収集)

2 回目の情報収集がスタートする。

まずは佐藤が今回の黒幕候補のマスターアルカヌムについて<交渉>で達成値 23 をたたき出し情報を獲得した。

- ・マスターアルカヌム<情報：FH>14or<交渉>14

マスターアルカヌムという人物は 10 年近く前に死んだとされている。しかし、最近ディオゲネスクラブ内で同名のエージェントが活動している。人という枠からの解放、完全なる存在への昇華を望んでいる。

するとこれをトリガーとしてシーンが発生した。GM としてはあくまで情報収集のシーンで長めの RP を行うためにシーンという言葉を使ったつもりだったので登場判定は行わなかった。

▽シーン 11：告白

桐島の腕のなかですやすやと眠っていた清羅は不意に目を覚ました。(*40)

桜庭：「ん…暖かい…あれ、私…」 清羅は仮面を被っていた時の記憶が朧気だ

佐藤：「やあ眠り姫のお目覚めかな？」

桐島：「おはよう、清羅」

桜庭：「おはよう、佐藤さん…桐島くん…私、どうしてたの？」

桜庭：「マスターを追いかけて森に入ったはずなのに…」

佐藤：「まあ、そのあたりの細かい話は聞きたくれば後で聞いてくれるかな」

桐島：「……マスターにやられて伸びてたのを見つけたんだよ」

佐藤：「どちらかと言えばそのあたりはこちらが知りたいくらいだからね」

桜庭：「…嘘、マスターがそんなことするはずない…」

桐島：「するんだ」

桐島：「するんだよ、清羅……」

佐藤：「そんな言葉をかけたところで詭弁だと思うけどね…それはさておき」

佐藤：「どうやらそのマスターとやらを随分と詳しく知っているようだけれど」

桐島：清羅を起こして膝に座らせて董に向き合わせます 抱きしめ続行

桜庭：「マスターは私を救ってくれた人…」 回されている手をぎゅっと抱きしめて語る

桜庭：「母親に殴られて下衆な男どもに邪な目を向けられて、葉っぱと血とすえた臭いから私を拾いあげて、医薬品とスープの匂いで包んでくれた。」

桜庭：「私には優しくかった…でも臆病なところもあったかな？ソフィアに似ていた…」

桜庭：「ただ、時々人が変わったように狂って、私の体を実験台にしていた…完全になるための儀式だって…でもあれはあの人じゃない…別の人格…」

佐藤：「それはまあ実にFHらしい人物なこと」

桜庭：「私の記憶はこの程度…」

桜庭：「いつのまにかマスターは居なくなった…」

桜庭：「それに今日会えたんだ…ソフィアと会って…マスターが来てソフィアにはついて来ないようにいって森に入った。」

佐藤：「じゃあ森に入ったのは二人きりだったと？」

桜庭：「途中でソフィアが居るのに気付いて追い返したはずだけど…」

桜庭：「何か変？」

佐藤：「まあ別にそう変ってほどでもないかもしれないけれど」

佐藤：「彼女自身随分と曖昧で追い返されたとも言っていないからね」

桜庭：「はっきり返事をしたのを聞いたはずだけど…マスターと会ったことも言ってなかった？」

桐島：「聞いてない」

桜庭：「う～ん、そういうの黙ってる子じゃないと思うんだけど…」

佐藤：「寝ていてよく覚えていない、だとき」
桜庭：「寝てた…私が会ってから追い返すまでずっと起きてたはず…」
桐島：「…そういや。寝てたってわりにはそういう跡は見なかったな」
佐藤：「とすると、彼女自身が嘘をついているか…嘘をついていないとすれば…まあ、それこそ二重人格ってやつになるのかな？」
桐島：「どっちにせよ問い質す必要はありそうだな」
佐藤：「とりあえず、覚えていることはソフィアが来て、次にマスターが来て、その後に二人で森に入ったところ、ってことだね」
桜庭：「うん」
桜庭：「マスターはいつの間にかいたって感じだったけど」
佐藤：「ふむふむ…改めて聞くけれど、このタブレットには見覚えあるかな？」
佐藤：「まあ発見者が発見者だから状況すら疑わしいのだけれど、どうやら君が持っていたらしいからね」(*41)
桜庭：「えーと、たぶんマスターのかな、誰がやったのか覚えてないけどマスターを誰かが撃って落とされたのを拾ってような？マスターと会ってからなにかを顔につけられて…」
桜庭：「そこから記憶がない…」
佐藤：「なるほどね…じゃあまあ、一応手がかりとして考えておこうかな」
桐島：「……なあ清羅」
桜庭：「何？桐島くん？」
桐島：「マスターが”そういうこと”をしないなら。俺を呼ぶ必要はないだろ」
桐島：「俺は肉壁になる以外に能はない。危険のある人物に会いに行くんでなければ俺は不要だ」
桜庭：「…マスターはおかしいの…優しいマスターと怖いマスターがいる…優しいマスターはそういうことをしない…怖いマスターも私を意味もなく殴ったりはしない…ただ実験につき合わせるだけ…」
桜庭：「……私は、なにか真実と向き合いたくなくて、怖かったからあなたに居てほしかった…」
桐島：「……清羅がマスターについて話す時は、楽しそうだったからな」
桜庭：「そう、だっておいしいものを食べさせてくれて、本をよんでくれて、抱きしめて寝てくれた。それ以外のことはすこしだけしか思いだせないもの…」
桐島：「俺は、マスターアルカナムはジャームだと思っている。いや、ジャームでなかったとしても」
桐島：「行き場のない子どもを自分の都合で弄繰り回す、どうしようもない悪人だ」
桜庭：「……」叱られた子供のように俯く
桐島：「なあ、本当に優しい人なら実験に何か付き合わせたりしないんだよ。それが普通なんだよ」

桐島：「……俺がもし今から清羅に乱暴をしたとして、清羅は俺を優しい俺とそうじゃない俺に区別するのか？」

桜庭：弱弱しく首を横に振る

桐島：「同じことなんだよ…」

桜庭：「認めたら…私が家族と呼べる人はいなくなる…私はずっと独りだったことになる…」

佐藤：「まあ、私に言わせれば悪人が善業をしないなんてことはないけれどね」(*42)

桐島：「ごめんな、キツイこと言ってる。清羅がマスターにそれでも救われたってのは分かっているんだ」

佐藤：「悪人だって自分勝手なだけだから、善行は善行として存在するものさ」

佐藤：「ただ、善行を受けたからと言って一生の恩義に感じるとかそれを絶対視するとか」

佐藤：「そういった話は控えめにした方がいいことではあるけれどね」

佐藤：「関係のある話かどうかはわからないけれど、縁切りたいとかそういうのじゃなければ悪人の家族がいたっていいと思うしね」(*43)

桜庭：「そうかな…ありがとう…」

桜庭：「そういうのはちょっとだけ違うけど、その考えもあるかな…」

桐島：抱きしめる手を左手だけ離してしばらく頭を掻きまわして唸ってから

桐島：「……家族なら、いる。既に一人は」

桜庭：「…？」よく分からなそうな顔で

桐島：「俺」

桜庭：「…いいの？」

桐島：「合鍵、渡しただろ。……そういうつもりじゃなかったっていうのは、正直な所そうなんだけど」

桜庭：「アンタ、天然じゃなかったの？」

佐藤：「永住地獲得だねひゅーひゅー」

桐島：「そっち方面のアレコレ全く分からんのはまあ、本当だけど」

桐島：「そんな寂しそうな顔させるつもりはなかった。と言いますか」

桐島：「俺としてはマスターアルカヌム倒すのを覚悟して貰わないといけないな。と思いまして」

桐島：「まあそれも清羅がマスターとの過去を楽しそうに語ってるのは見てたから、キツイ話になるだろうなとは思ってたよ？ちゃんと」

桐島：「だからその一あのー……ずっと独りだったとかは言わせたい言葉でもなかったしと言いますか」

ここで雨宮が登場する。

雨宮：「そうか、そう決めたのかい」

桐島：「あ、未羽。決めた？」

雨宮：「何回か聞いた筈けどもう聞く必要もなくなったなという話さ啓一」(*44)

桐島：「主語を話してくれよ。ノイマン会話にはついていけないぞ」
雨宮：「えーだから清羅と番になるからもう好感度聞く必要ないよねって事だけど」
桐島：「ああ、それね。そうだな。世話になった」
雨宮：「じゃあ、これからは無茶はできないね、啓一」
桐島：「……………それは」
佐藤：「そういう色恋沙汰が好物な変人とかもいるし付け込まれないようにした方がいいよ？」(*45)
雨宮：「ああ安心したまえ」
雨宮：「啓一が悩もうが悩むまいが解決する素晴らしい手段を既に用意してあるから」
桐島：「嫌な予感しかしないぞ？」
雨宮：「これからはその役割は私が半分引き受けよう。彼女を悲しませるものではないよ」
桐島：「は？」
雨宮：「ほんとうに。悲しませるとクローンを作り出すから」
桐島：「は？クローン？」
雨宮：「そう。それは嫌だろう？」
桐島：「未羽が作りたなら作れよ。それより何で未羽が俺の荷物を背負う必要がある」
桐島：「これは俺が俺のために抱えた荷物だ」
雨宮：「分からないなら教えてあげよう。その荷物は今を持って君と清羅が同時に背負う事になるからだ」
佐藤：「そのクローンはあまり同意しない方がいいと思うけれどね…まあいいか」
桐島：「……………それは、そうだが」
雨宮：「啓一だけなら良いけど清羅もとなるとちょっとね～って気持ちなら分かって貰えただろう？ それで話は終わりだ」
桐島：「終わらねえよ！未羽が背負う理由がねえだろ！？」
雨宮：「アホか君は」
桐島：「ていうかお前が俺の分やるとか言い出したら余計俺はお前に傷ついて欲しくないわ！」
雨宮：「なんで私が今このタイミングでいろいろぶちまけてるんだと思ってるんだ」
雨宮：「わがままを通したんだから見返りにこっちのわがままを通させろ」
桐島：「俺は少しでも世界を優しさで満たしたくてやってんだよ！俺じゃジャームを倒せないから！戦えるお前が俺のバカみてえなやり方通す必要がどこにあるんだよ！？」
桐島：「この世界じゃ俺みたいのじゃなくて力を振るえる人間こそが誰かを救えるんだ！俺は誰も傷つけないで、でも苦しんでる誰かを助けたくて、だからこうしてる」
雨宮：「……啓一の言いたい事は分かるけどそれは君のエゴなのも事実だろう」
雨宮：「なら私のエゴも……そう」
雨宮：「つい先ほどの、啓一が清羅に向けた言葉で千切れた私の感情をぶちまける機会を貰

いたいだけさ」

桐島：「……………ヨシ分かった」

桐島：「お前が俺の荷物を背負うだのどうだのはまず置く。ぶちまけてくれ」

雨宮：「けっこう」

雨宮：「何心配するな、私は感情を理性の制御下におけるノイマンだ。事が済んだらうまくやってやるよ」

佐藤：「とりあえず話は付いたのかな？」

桐島：「何をぶちまけても認めるつもりはねえからな！？」

佐藤：「まあ、私には孤独にしないと云った当人がさっそく孤独にさせようとしているのになくらしいにしかわからなかったのだけれど」

桐島：「俺だってそれも分かってるよ！でもそれは俺と清羅が改めて話しあうべき事案であって未羽が荷物かっさらってくのはまた別だろ！」

佐藤：「そうだね、私には分からないからそのあたりは存分に話し合うといいよ」

桐島：「よし、ありがとうな董！」

雨宮：「うるせー黙れバーカたまには他がどう感じてるかを味わえ」

桐島：「お前たまにすっげえ雑に暴言吐くよね」

雨宮：「今はイラついてるだけだから」

桜庭：「あー、あー、きりしえあ、きき桐島くん？」

桐島：「はい」

桜庭：「えと、私を独りにしたら許さないから…あの世まで追いかけてでも家には帰って来させるから…」

桐島：「……うん」

桜庭：「今日からアンタを啓一ってよぶ。私の家族になるんだから、いいよね？今までみたいな無茶はもうさせないから…よろしくね、啓一」 語気とは裏腹に顔はにやついている

桐島：「よろしく、清羅」

桐島：「……その一、俺の無茶については今回の件を片付けてから家族会議の時間を」

桐島：「頂けたらなあ、と……」

桜庭：「……まあ、いいよ」

そうして、一つ大きなことが起こってキミたちは森の探索を続けるのだった。(*46)

(*40)

GM：清羅が目をさまします 佐藤さんは清羅と交渉して情報を手にいれたということになります

佐藤：ふむふむ

桐島：あっそうだ 清羅側から抜け出そうとするまでは抱きしめ継続でお願いします

(*41)

佐藤：まさかとは思いますが、この「マスター」とは、あなたの想像上の存在に過ぎないの
ではないでしょうか

桐島：こわいよお！

七種：衝動:妄想ってそういう…

(*42)

佐藤：口挟みたいけれど挟んでいいものかな！

GM：ちょっと二人だけの空間みたいで恥ずかしくなってきたからいいぞ！

雨宮：私も混ぜろ！（後で）

桐島：バリバリ皆いるからな…

七種：たぶん七楽はソフィアの耳を塞いでどこか遠くを見ている

桐島：大丈夫？そいつ多分アルカヌムだよ？

七種：この子はソフィアなんだ 誰が何と言おうとソフィアなんだ…

(*43)

佐藤：ちなみに董自身は FH な親が愛しているのか有為と見ているだけなのか心の底か
ら区別つけてません

GM：oh…

七種：それ一生解決しないやつ…

佐藤：とりあえず董的には桜庭の恐怖心が理解できてない RP 出来たから満足だ

(*44)

桜庭：（ん？今ここ皆いたな？）段々顔が赤くなってきた

原文ママ

(*45)

佐藤：右側に立ち絵がまだ見えたままな人！（カルペ・ディエムのこと。ユドナリウム・リ
リーの部屋上の右側にコマが居た）

桐島：こういう話好きそうっすね

七種：一体何花リリーなんだカルペ・ディエム…

カルペ・ディエム：「いいわね恋！その思いこの仮面でおちまけちゃいなさい！」

七種：何考えてんだテメーツ！

(*46)

七種：4人から少し離れた木の傍で。

七種：「……教えてくれ」

七種：「余は……余はなにをどうしたらよかったのだ……」

七種：「戦闘が終わったと思ったら友人同士のアヤシゲで重要な会話が突然始まった時」

七種：「高貴なる者はどう反応すべきなのか! 祝うべきか呪うべきか!？」

七種：「教えてくれ、部長……!」

七種：——無論、応える声はなかった。

▽情報収集

シーンは再度情報収集へと戻った。

まず七種が犬走の素性を調べ上げた。

- ・犬走遊について <情報：FH>9、10or<運転：多脚戦車>9、10

犬走遊は FH のレムノスセルと呼ばれる兵器開発セルに所属している。そこで「20号」と呼称される彼女はレネゲイドに感染した多脚戦車オルトロスに組み込まれており外を出歩いたり他人と意思疎通できる状態にない。

達成値 10 このレムノスセルで犬走遊以外に最もオルトロスに適性があったのは「14号」と呼ばれる被検体である。

七種：「……………どうして」

七種：「どうして、こうなるんだ……………？」

七種：愕然としつつも周りの人と情報共有しよう

そしてそのとき犬走の姿は見当たらなかった。

次に桐島がマスターアルカヌムの拠点を特定した。

- ・マスターアルカヌムの居場所 <情報：アカデミア>8

マスターアルカヌムは学園島に高濃度レネゲイドの大結晶が眠っていると信じて古代の遺跡を探している。現在、彼女が調査しているのは森の奥地である。

そして雨宮が姿を消した犬走の行方を掴んだ。

- ・犬走遊？の行方 <情報：アカデミア>7

この情報には中身がなくそのままシーンが移った。

▽シーン 12：登壇

キミたちが森を進んでいると不意にあたりの様子が冷ややかになっていった。
あたりを見回せば気付くだろう…首を吊った女生徒の死体があちこちに見えた。
しかし現実感がなかった。(*47)
それらはどれも犬走の見た目をしていた。

桐島：「これ…遊だっけ？全部アイツの見た目だな…」

佐藤：「ふうん？」

七種：「一体……何がどうなっておるのだ」

雨宮：「自殺願望でもあるのかい、彼女」

桐島：「戦車に組み込まれてるんだよな？七楽の話だと」

七種：「ああ、奴が"オルトロス"の 20 号なら……信じたくはないがな」

佐藤：「コピーか偽物かってことかい？」

桐島：「運転中に死んだにしてもわざわざ吊るす意味も分からねえし…」

桐島：「悪趣味には違いねえが」

犬走：「ねえ、あなたたち冷静すぎない？怖がって欲しかったんだけど？」

彼女は突然姿を現した。

桐島：「よう。生きてるようでなにより」

佐藤：「怖がる要素がないじゃないか」

雨宮：「怖がってはいないが残念だとは思っているよ？」

犬走：「残念？そうよね…七不思議の正体がオーヴァードなものね？」

桐島：「いやそっちじゃねえだろ」

雨宮：「いいや。友人だと思ってたもので」

犬走：「そう…私はまだ友達だと思ってる…」

雨宮：「私もそうだがね」

七種：「……貴様は犬走氏なのか、それとも 20 号なのか？」

犬走：「どちらでもあってどちらでもない…」

犬走：「そうだ…聴いてもらえる？七不思議のネタバラシ」

雨宮：「もちろん」

犬走：「あなたが聴いてくれるなら十分ね…もっと劇的な状況が良かったけれど…」

犬走：「まず、ここに吊り下がってる死体…幻覚だけど…嘘じゃない…」

犬走：「この数だけ"私"の体が地面に埋まってる…」

雨宮：「……」

雨宮：「……まあ当然だが要領を得ないね。どういうことだい？」

犬走：「"私"はブラムの従者…何人でも居るエキストラ…たまたま"犬走遊"の代役を勤めて
いるだけ…」

犬走：「本物の“私”は鉄の棺に閉じ込められている…何も見えない、聞こえない、体も動か
せない。いえ、全部できるけどもその意味はない…」

犬走：「だから私が居る。彼女の代わりに外を生きる。でも、私は本物の犬走遊になって
はいけない。」

犬走：「彼女は私を縛る。友達を作ってはいけない。趣味をもってはいけない。着飾って
はいけない。賢くなってはいけない。遊んではいけない。笑ってはいけない。泣いてはい
けない。怒ってはいけない。すべて彼女のものだから 」

犬走：「今日のメイクは死に化粧…痛みにたえて…」

桐島：「取り込まれてるのに普通に外で会ってたの謎だったけどそういうことか。やるこ
と決まったな」

佐藤：「随分とまあめんどくさい縛りをつけたもんだね」

七種：「それが……"組み込まれた"者の末路か」

雨宮：「なるほどね」

犬走：「私は代役。犬走遊の物語に居るべき存在ではない。そんなのは嫌」だんだん興奮
してきたようであなたたちの声に気を配っていない

雨宮：「いいと思うよ？」

雨宮：「本当に下剋上なんて達成しなければだけど」

犬走：「馬鹿げている。死体も同然の達磨に未来なんてない。終わってるやつがどうして
私の幸せを奪うの？なんでもできるのになんにもできない奴に合わせなくちゃダメ？私に
は私の役が欲しい！雨宮さんは私の気持ち分かってくれるよね？あなたもそういう人でし
ょう？」焦点の合わない目で問いかける

雨宮：「悪いけど違うね——とはいえ、それは境遇の違い故にだから。 君には悪いとは
おもうけれど」

犬走：「まがい物の”私”のほうが本物の私より優れている」

桐島：「……鈴音の時も聞いたなそれ。そんなに大事かね……」

佐藤：「それとこれとの関係性が一切見えないのだけれどね」

犬走：「雨宮さん？あなたは主役になりたくないの？どこにもいない本物よりも今いるあ
なたの方が尊い…」

犬走：「そうは思わない？」雨宮から何か引き出したいようだ(*48)

雨宮：「全然？」

桐島：「……」

雨宮：「まあ……それを聞くという事は私の身の上を知っているという事でいいのか
い？」

犬走：「FHはどこにでもいるわ」(*49)

犬走：「もう死んでるんでしょあなたの母は？あなたを縛ったりしない」

犬走：「あなたは何をしたって咎められないじゃない」

雨宮：「んー……なるほど」

雨宮：「そこが僕と君のスタンスの最大の違いっていうかね」

雨宮：「僕は父さんの為に母さんを幸せにしたいんだよ」

雨宮：「おしめを取り換えてくれたし、毎日弁当を作ってくれたし、あまり役には立たなかったが勉強も教えてくれた」

雨宮：「入学式に来てくれた。授業参観に来てくれた。調理実習で作ったクッキーを食べてくれた」

雨宮：「……ああ、まあこの学校の話ではないけど」

雨宮：「そんな父に報いたいと思うのは当然ではないかな？」

犬走：「よく分からない…報いたいのならあなたがなにか抑える必要はないじゃない…それに死人がどうやって幸せになるというの？」

雨宮：「いやだなあ…あるだろう？」

雨宮：「そんな父が僕よりも愛した母は早逝したんだぜ？」

雨宮：「母は僕と遺伝子的に全く同一だったにも関わらずだ」

雨宮：「だったら、このまま僕が幸せになったら、父に愛されて幸せだった筈の母は」

雨宮：「僕より不幸だったという事になってしまうじゃないか？」

桐島：「……ならないだろ」

佐藤：「??？」

桐島：「遺伝子が人とそのなりを形作るわけじゃないだろ」

犬走：「分からない…それは誰かの不幸じゃないか…」私 “の幸せはそこにはない…” 自他の境目が怪しくなっている

雨宮：「そうだね、啓一の言いたいことは分かる。疑念ももつとも」

雨宮：「けど僕は数理部だから、“ $A > B$ だから $A > B$ である”という理論の方が好みでね、悪いけど」

犬走：「他人の不幸がなんだというの…」ぶつぶつとうるさい

桐島：「……俺には、お前は娘として愛されてるようにしか見えねえよ」

桐島：「子が、親より幸せになっちゃいけない道理も分からねえし」

桐島：「他の誰かより自分が幸せだと決めつけられる道理も、俺には分からねえよ」

雨宮：「……なに？」

桐島：「幸せの形は個々人で違っていいはずだ。そして己の規定する幸せの中で自分の人生が幸福だったかそうでなかったか。それを判断するのはいい」

桐島：「でも何でお前が会ったことすらない人の幸福を規定する。なんで自分がより幸せだったと判断できる」

桐島：「お前の母はお前に、自分が不幸だったと訴えたのか」

雨宮：「……」

桐島：「そして仮にそう思っていたのだとしても。お前の母もお前の父も」

桐島：「お前が自分たちより幸せにならないことを望んでいるのか」
雨宮：「なるほど……なるほど。馬鹿げた理論だと自分で思ったから、そんな事言われてみると思わなかった、実際」
桐島：「……俺はそのバカげた理論で今まで人生やって来たんでな」
雨宮：「しかし……なんだな」
雨宮：「自己犠牲第一の啓一なら分かって貰えると思ってたんだけど」
桐島：「分からねえよ？だって俺にとってはそれが幸せへの道だったんだからな」
桐島：「第一。俺は皆が皆幸せになれたらいいなって夢想してんだ。幸せになったらダメなんて思ってるの、共感できるわけねーだろ」
雨宮：「……………」
桐島：「俺はお前にも幸せになって欲しい」
雨宮：「あのね啓一」
桐島：「おう」
雨宮：「僕もこの馬鹿げた理論で今まで通してきたわけだよ」
雨宮：「困るんだよね……簡単に人生変えろなんて言われてもさ」
桐島：「俺も、変わるさ。変わらないといけない。清羅と生きる決めたから」(*50)
雨宮：「んじゃ取り消したまえよ」
桐島：「……何を？」
雨宮：「おいおい」
雨宮：「人が二人分の人生背負い込めるなんて思ってるんならそれこそ傲慢ではないかね」
桐島：「あ？二人？」
雨宮：「そうだ。君は既に清羅の人生を変えと言った」
雨宮：「その場しのぎの辻斬り程度ならともかく、人生観を変えろと言うのはその者の人生背負い込むのと同義だぜ」
桐島：「お前もさっき、俺にそう言って来た俺は考えているが」
ここで犬走が発言するも一蹴された。(*51)
雨宮：「私そんな昔に生きてないからなー」
桐島：「……未羽。お前はさっき俺の役目を半分担うと言ったろう」
桐島：「それは俺の人生を担うってことじゃあないのか。俺とお前はそういう関係じゃないけど担おうとしたんじゃあないのか。何で自分はよくて俺はダメとか訳のわからん線引きをする」
雨宮：「……………む」
雨宮：「……はぁ」
この辺りでホーエンハイムが佐藤と会話を始めた。(*52)
雨宮：「分かった、なら言ってやろう」

雨宮：「単に君を困らせたり痛い目にあわせたかったり、とかそういう感情だよ、ただの」

雨宮：「深い意味なんてないさ」

桐島：「嘘付け。お前そんなはた迷惑な奴じゃねえだろ」

雨宮：「はた迷惑な奴だよ？」

雨宮：「清羅に嫉妬してそれぐらいの事を言うぐらいにはね」

桐島：「困りはするけど痛い目には合わねえよそれじゃあ」

雨宮：「だから言っただろ、おかしくなってんだよ私は」

桐島：「……嫉妬？清羅に？」

桐島：「何でお前が清羅に嫉妬するんだよ」

雨宮：「あーそれ聞く？ マジで？ 言うか言わないか迷ってたけどそっかーそれ言われちゃったしょうがないなーこれに関しては啓一が悪いんだからなー」

桐島：「……なんでお前が清羅に嫉妬してたら俺が悪いことになるんだよ」

雨宮：「すーきーだーかーらーですー」

桐島：「えっ」

雨宮：「好きだからですライクジャケラブよりですエルオーブイイーですー」

雨宮：「はい言わせてーちょっとこの男子マジ言わせましたありえないんですけどー」

桐島：「は？え。い、いや待てよ！お前自分で攻略不可って」(*53)

雨宮：「だからそれは私が幸せになるつもりがなかったから」

雨宮：「でも私、だから啓一ならいいと思った」

雨宮：「自分が先に死ぬから相手を作らないって奴だったら、まあ」

雨宮：「多分くつついても私より先に死ぬって事だし」

雨宮：「それならまあ母さんより幸せにはならないだろうからまあ許してくれるよねって」

雨宮：「で…… ………………終わり」

桐島：「……………」

雨宮：「……………」

桐島：「——でもそうなら」

雨宮：「よっしゃマスターアルカヌム覚悟しろー！」

桐島：「未羽」

雨宮：「……なんだよ」

桐島：「俺は、変わる」

桐島：「それは多分。お前とそうなる未来があったとしてもそうだった」

桐島：「お前はその時、変わってくれたのか」

雨宮：「君が背負ってくれるんだったら、それも悪くない選択肢だったよ」

桐島：「そうか」

桐島：「そうか……」

桐島：「……これ以上俺が未羽に何か望むのは、清羅に不誠実だな」

雨宮：「そうだな…まあでも」

雨宮：「君に免じて、もう少し私の幸せについて考えてみるとするよ」

桐島：「……ありがとう」

雨宮：「……………」

雨宮：「よっしゃ覚悟しろ犬走遊一！」

七種：「切り替えが早すぎる!？」

雨宮：「自分代謝制御だから、ノーマルヒューマンと違って感情を制御できるノイマンだから」

佐藤：「それでその、そこでいじけてしまった子なんだけれど」

犬走(従者)：「ここから？私、ちょっと劇的にこの場を締めるつもりだったのだけれど…？」大分不貞腐れている(*54)

雨宮：「遊」

桐島：「……」伏し目がちにして黙っている

雨宮：「君が下剋上したいってんなら、私は構わないよ」

雨宮：「それで、何もかも平和に事を締めて」

雨宮：「犠牲も出さない方法であればけど」

犬走(従者)：「いいえ？私にそんな力ないもの…私ができる反抗は精々役を降りることだけ…」

犬走(従者)：「こういう風にね…」いつの間にか彼女の前に吊り下げられたロープがある(*55)

そしてそのまま首をかけるとロープは吊り上がった

雨宮：「…はぁ？」

佐藤：「??？」

七種：「な、なにをしている!？」

七種が慌てて降ろそうとするもすでに犬走(従者)は死亡していた。

佐藤：「本体の鬱って従者に伝染するものなのかな？」

桐島：「分からん…」

七種：「……なんだ、なんだというんだ、これは」

七種：「この……周囲のこれも！　すべて今のような顛末なのか!？」

桐島：「……従者ならまた作ればいだけ、ではあるが」

犬走(従者)2：「そう、こんなことをしても無駄。配役は本物の“私”が決める、私は役から降りられない」奥から新たな犬走遊が現れる

犬走(従者)2：「また、死体を埋めなきゃ…騒ぎになる…」

桐島：「七不思議になってる時点でもう騒ぎじゃね？」

犬走(従者)2:「普段見せてるのはのっぺらぼうよ…人払いもかねてね…」

佐藤:「これは本体の趣味なのかい？」

犬走(従者)2:「脅かすのはそうね…こんな形になってるのは私がやってるからだけど…私の趣味も“私”の趣味にあたるのかしら…？」

雨宮:「……君は結局、何が望みなんだい」

犬走(従者)2:「役から降りたい…最初はそうだった…でも今はそれを口実に死にたいだけ…もう私ジャームなのかもね…」

桐島:「……縛られるのが嫌なんだよな」

桐島:「……機械に取り込まれてる方、まずは解放しようぜ」

七種:「……だな。向こうの思惑がどうあれ」

七種:「こんな光景を生み出すようなことは、間違っている！」

桐島:「あれが解放されて自由になったら従者にもうあれこれ縛る必要ないだろ。そっからはアンタらの話合いだ」

佐藤:「あれって普通に外殻壊せばいいのかい？」

桐島:「どうなん七楽」

七種:「……現物を見ない限り、何とも言えん」

七種:「余はこの通り、中途までの手術で脚がつぶれたからな」

七種:「もしも……もしも臓器にまで接続を伸ばしていれば」

桐島:「とりあえず剥がす時に負荷掛かるとかだったら俺が肩代わりできる」

七種:「……無茶をするな、と言っても聞かんのだろうな」と横目で桐島氏を睨む

桐島:「助けられる命は助けるべきだろ。てか一人分なら余裕だから普段は全員分にしてるからやべーだけだって」

七種:「前者は全く同意なのだがな……まあいい」

佐藤:「まあ私にはそうする道理は別にないんだけど…どうせ直面するのならオマケ程度には手伝うよ」

桐島:「サンキュー董」

七種:「……いいか、“解放”といっても、物理的に解き放つだけが手ではあるまい」

七種:「余はこの通り、今もアルに縛り付けられてはいる。こいつが居なけりゃ手水すらおぼつかんよ」

七種:「だが、同時に自分の脚でしっかりと"歩いている"つもりだ」

七種:「あえて20号と呼ぶが……彼女もマシンそのものに生命活動を依存しているのなら」

七種:「解放とは機械とのつながりを絶つことではない……」

七種:「——マシンをいいように利用する方法を教え込むことだ！」

桐島:「じゃ七楽には説得を頑張ってもらおう方向で」

佐藤：「まあそのあたりは専門に任せるよ。もし悪性の装置なら一度壊して代替にした方がいいだろうし」

桐島：「んじゃあ方針も決まったし行くかあ。遊？案内してくれよ」

犬走(従者)2：「わかった…こっちよ…」

雨宮：「ありがとう、わが友よ」

このタイミングで追加の情報収集シーンで侵蝕値が上がること(GMはそう設定した)を避けて調べていなかったミドル戦闘で出会った怪物の正体を佐藤が明らかにした。

・怪物の正体 <情報：FH>6

マスターアルカヌムの目的のための実験台になったものたち。レネゲイドの強化や人体改造の犠牲者である。

佐藤：「とりあえずマスターアルカヌムが何かしらしようとしているのを阻止すれば全部関係してくることになるかな」

桐島：「全部アイツが悪い。全部」

雨宮：「まったく FH ってのはろくでもないね」

七種：「今更だな」

雨宮：「今更でも言いたくなる時だってあるとも」

七種：「……まったくだ」

雨宮：「あと今の私はキレたナイフだから無差別に傷つけたいんだ」

桐島：「……」なんも言えん……と黙っている

七種：「や…やめろ！」

七種：「いややめてください！」

そんなことをしながらキミたちは強大な敵の待ち受ける場所へと赴いた…

そして桐島と佐藤が購入判定を行うが特殊なシーン進行をしているにも関わらず確認を怠っていた GM は 2 回の購入判定を提案し、桐島は UGN ボディアーマーを購入して七種へ渡し、さらに応急手当キットを購入して桜庭に使用した。佐藤はすごい服から強化ビジネススーツ(*56)へのアップグレードを試みるが失敗した。

(*47)

GM：よく見てみますか？

桐島：見ます

佐藤：調べよう

七種：ちょっと目をそらす

(*48)

シナリオ開始前に雨宮 PL から雨宮の独白を行いたいと要望があり、独白の内容も聞いていたため、ここでそれを行ってほしかったのでこのような RP になった。

(*49)

桐島：まじで周囲に FH 関係多い

佐藤：PC のメンツが FH 関係者ばかりだから事件がとことん FH 関連してくる！

七種：やっぱ怖えぜ…FH！

(*50)

桜庭：「んふっ！」意識すると恥ずかしいようだ

(*51)

犬走：「ねえ、私は放置かしら？」退屈そうにあぐらをかいて地面に座っている

雨宮：くっ…ごめん

桐島：「ごめん今大事な話してるんだわ」

犬走：「そう…」悲しそうに

七種：「たぶん向こうも同じことを思っているのではないかな……」

佐藤：「なんだかよくわからないけれどお疲れ？」慰めておこう

犬走：「やさしいわね…1 よ n、七種さん…佐藤さん…」

七種：14 号呼びしかけててダメだった

佐藤：かわいそ…

佐藤：董には話の繋がりが 1 割も理解できていないので退屈そうな犬走を慰めることしかできない

(*52)

ホーエンハイム：「そういえば佐藤さん…一人でここに来てましたけどどうしたんですか？独りで七不思議調べに来たんですか？」

佐藤：「ちょっとまあ、人に頼まれて調べごとかな？」

ホーエンハイム：「へえ、ここに来るの怖くなかったんですか？」

佐藤：「ああ…死体が吊るされている森って怖いんだっけ？」

ホーエンハイム：「こ、怖いに決まっています！い、今も目を瞑っていますから！」

ホーエンハイム：「そ、それにお化けとか…」

佐藤：「レネゲイドがなんやかんやしているこの時代にその程度で怖いというのもよくわからないんだけどね…」

佐藤：「その死体やお化けについてどういうところが怖いか教えてもらえるかな？」

佐藤：「言うのも辛いならいいけれど」

ホーエンハイム：「か、科学だけだった時代もお化けは怖かったです！レネゲイドとか関係ありません！」

ホーエンハイム：「だって、道半ばの死者なんてどんな未練があるか…の、呪いとか…」

佐藤：「まあ、確かに触れられない状況から一方的に殴ってくる相手は怖いとはいえるけれど」

佐藤：「未練、呪い…それらに反応して害があるなら脅威だけれどね…ううん？」

ホーエンハイム：「執念だけでもお化けは何百年も居られるんです」

佐藤：「情報が何百年も維持される…すごいことじゃないか」

佐藤：「実際、そういった思念を保持し続ける物体もあるんだよね…つまり、そういったものから漏れ出した余波が…？」

ホーエンハイム：「ええー…そうなるんですか…こ、怖くないんですか…」

佐藤：「そうだね…むしろワクワクしてきてしまったよ」

(*53)

七種：え えらいことや…戦争や…

佐藤：隠しルート突入しちゃったかー

GM：マジで知らなかった

佐藤：思った以上に好感度高かったのは本当にびっくり

(*54)

ここから本体と区別するため犬走(従者)と名前を変えた。

(*55)

犬走(従者)は衝動：自傷のジャームだった。

(*56)

インフィニティコード収録の防具。装甲値は低い【社会】の判定にボーナスがつく。

■クライマックスフェイズ

▽シーン 13：閉幕

キミたちは森の最奥へとたどりついた。そこには無数の蠢く怪物たちとひととき大きな多脚戦車が地面を掘っていた。他に人影はない

犬走(従者)2：「あ…忘れてた…マスターアルカヌムは…」 そう言った瞬間…

桜庭：「ぐっ…」

桐島：「清羅！大丈夫か？」 支える

しかし桐島が支えようとしたときすでに清羅の姿はそこにはなかった。

桐島：「……！？」

雨宮：「清羅？」

そしていつの間にか怪物たちと戦車にキミたちは囲まれていた。

桐島：「マスターアルカヌムが何かしやがったか！」

七種：「つまり……こっちまで来られちゃ困るというわけだ」

桐島：「クソッ……邪魔だ！」

雨宮：「やれやれ意地が悪いね」

マスターアルカヌム(*57)：「そうだ…全ては私の罠…カルペ・ディエムから佐藤菫に情報を吹き込み、犬走遊の従者が雨宮と接触するよう仕向け、清羅が桐島を誘う事は織り込み済み、そして私が七種七楽を誘った…」 戦車の上で清羅を抱きかかえている

桐島：「おい」

桐島：「誰の許可得て触れてんだ」

マスターアルカヌム：「知るか…もとより私の被検体だ…」

桐島：「てめえ…」

雨宮：「ま、FHのやることだからねえ」

佐藤：「私については一応表に出ない情報になってるって聞いたんだけどね？」

マスターアルカヌム：「そうか、やはりお前がオーダーか…」

佐藤：「なんだい、じゃあそこまで大っぴらに伝わってるわけじゃないのかい」

マスターアルカヌム：「引っかかってくれてうれしいよ」

佐藤：「まあ、その辺で苦勞するのは UGN の方だからね。その辺よろしくって言うておくから」

佐藤：「それで？これら一連の無駄に何か意味があるのかい？」

マスターアルカヌム：「私は完全にならねばならない、誰かに棄てられずに、怯えずに生きられるように…」

桐島：「誰かを犠牲にするのが当然ってメンタルの奴がそれらから逃げられるわけねえだろ」

マスターアルカヌム：「この島に、そのための賢者の石がある。いま広まっているデミでも小石でもなく…」

桐島：「お前が首尾よく賢者の石を手に入れた所で変わらねえよ。散々人を道具にして来た奴がよ」

マスターアルカヌム：「そしてお前たちには被検体として興味がる。だからここで捕らえる。」

桐島：「お前もそう扱われるだけだ」

桐島：「恐怖に立ち向かわずに逃げる奴が克服できるなんて甘い話ねえんだよ」

マスターアルカヌム：「そう扱われてきたからそう扱うのさ…私も…そのように生まれてきたから…」

雨宮：「生憎だったね」

雨宮：「少し前なら、“まあそういうものか、それならそれで悪くはないか”……と私だけは言ってやったかもしれないが」

雨宮：「今はちっとも、言う気になれん」

桐島：「お前が……お前が少しでも世界に優しくなれたら清羅は怯えずに済んだんだぞ！」

桐島：「苦しみを知っているなら何故それを減らそうとしてやれねえんだ！」

桐島：「お前らみたいな奴がこの世界に痛みばかりを寄越すから……！」

マスターアルカヌム：「それを知るには五百年遅かった…私は今、“私（ソフィア）”を生かすためだけの存在…他人など知らぬ…」

桐島：「散々痛みを振り撒いて来た癖に自分はもう傷つけられたくない！？ふざけてるのか！」

桐島：「……胸糞悪い」

マスターアルカヌム：「違うな…いずれ私が完全になれたなら、彼らも完全な存在に解放してやるさ…耐えられかは知らんが…」

雨宮：「悪いな、“マスターアルカヌム”」

雨宮：「脇役も主役も裏方も、舞台には必要なものだが」

雨宮：「観客席から石を投げて来る手合いの者は即刻退散願おう」

マスターアルカヌム：「……せめて悪役ぐらいとは呼んで欲しいな。私はそんな端くれの不出来な存在ではない…」

雨宮：「いいや」

雨宮：「聞こえないのかい？君へ向けられる声が」

雨宮：「役者も観客はおろか、ご近所さんすら」

雨宮：「早く帰れって言ってるぜ？」

マスターアルカヌム：「虫の声など誰が気に掛けるか…！」

桐島：「じゃあ俺らも虫を悪役を呼んでやる必要はねえな…」

佐藤：「まあ私はその欲求自体は否定しないけれど」

佐藤：「夢物語に耳を傾ける必要もないね」

七種：「賢者の石、か……何に使うのか知らんが」

七種：「そんなものの発掘のためにわざわざ御大層なデカブツまで用意したわけだ」とオルトロスを顎で指そう

マスターアルカヌム：「ああ、私も設計に関与したのでな…丁度いいから借りてきた」

マスターアルカヌム：「そういえば、お前見覚えがあるかと思えば14号か…滑稽だな、不完全な体だ…どうだ私の研究が実れば身一つで歩けるようにしてやるぞ？」(*58)

七種：ハ、と軽く笑う

七種：「わずか数年で随分と目が衰えたようだな」

七種：「余はちゃん和我が身だけで立っている」

七種：と、マシンを戦闘形態に

マスターアルカヌム：「さて、オーダー、賢人の思想というのは得てして荒唐無稽か欲にまみれてみえるものだよ…お前ならわかるかと思ったが…」

佐藤：「だから欲は否定していないじゃないか、ただ、荒唐無稽は別さ」

佐藤：「あくまで道の前にある乱雑なものを無視して突き進むのがそういう生き方であって、誰もが草むらしかないところを進むのはただの愚者なんだよ」

マスターアルカヌム：「お前も私を愚かと呼ぶか…！」なにかトラウマを刺激したようだ

桐島：「完全になる—とか言ってる奴が愚かじゃなかったら何なんだろうな」

七種：「凡愚だろうな」

マスターアルカヌム：「全く、うるさい奴らだ！肉片にしてから実験材料にしてやる！」
戦闘態勢へと入る

桐島：「今のお前にぴったりな言葉が一つある……」

桐島：「人の恋路を邪魔するやつは馬に蹴られて死ぬ」(*59)

七種：「……まあ、恨みつらみはあるにせよ、今の余の目的は一つ」

七種：「いや、二つかな……それも殴ってみればわかるか！」

七種：「——オルトロス、お前をぶっ飛ばして、その中身もぶん殴る！ 以上だ！」

雨宮：「なるほど……では啓一覚悟しろー」

桐島：「待てよ！！なんで俺なんだよ！！」

雨宮：「ふふ。そういう反応を返してもらえるだけでそこそこ楽しいものだな」

桐島：「やっぱりはた迷惑な奴だったかもしれん…」

佐藤：「まあ私にはそんな大義はないんだけど。利害の不一致と、一応まあ正体知る奴捕まえておけばUGNの後処理も楽になるだろうね」

佐藤：「というわけで覚悟してもらおうよ」

各々が戦闘に臨む姿勢を見せて衝動判定が発生するが犬走(従者)2が《墮落のいざない》と《原初の恐怖》(*60)を発動させた。

犬走(従者)2:「ごめん、こういう体質だから…」

難易度9の判定に各々挑戦するが、クリティカルや思い出の一品により、桐島以外は判定に成功した。(*61)

さらにマスターアルカヌムが《ファイトクラブ》を所持することやホーエンハイムへのロイスが鍵となることがPLへと伝えられた。

(*57)

マスターアルカヌムはEロイス《ファイトクラブ》(そのキャラクターがジャームとジャームでない2つの人格を持つ子とを表すEロイス)を持っており、ホーエンハイムのもうひとつの人格であった。

(*58)

GM: ごめん悪役ロール楽しい…

佐藤: いいんだ…それがGMの特権なんだ

桐島: いいんだ

桐島: 俺心底コイツ嫌い!!

佐藤: 遺産嘘だったのかよてめ一位の怒りはちょっとあるかもしれない

桐島: お前が優しくかったら清羅は幸せだったはずなんだが…?

七種: 楽しいよね…

桐島: はー! 嫌いー!

GM: 遺産自体はある…真実を掴み取っただけで…

佐藤: でも遺産特定したわけじゃなさそうだし…私がここにある遺産きつと手に入れられるはずなんですけど! って言われても困るし…

GM: そうだね

(*59)

佐藤: しかし勝手に恋路にしたのは桐島達だから馬に蹴られて死ねは横暴だな…

マスターアルカヌム(GM): しらそん

(*60)

《墮落のいざない》は衝動判定失敗で即座に侵蝕率を100%にするEロイスで《原初の恐怖》は衝動判定で上昇する侵蝕率の値を増加させるEロイス。

(*61)

佐藤は《シルフの詩》を使用した。

雨宮：8dx 参ります

(8DX10) → 10[4,4,4,4,8,8,9,10]+10[10]+5[5] → 25

雨宮：すげーぜ私

GM：なそ

桐島：つよい

七種：(1+2)dx+3+1@10>=9 《意志》+[思い出の一品]

(3DX10+4>=9) → 9[2,4,9]+4 → 13 → 成功

七種：よっしゃ思い出の一品握っておいてよかった

佐藤：(2+2)dx+2+1@(10) 〈意志〉判定

(4DX10+3) → 10[1,2,4,10]+7[7]+3 → 20

佐藤：なそ

桐島：じゃ普通に振るか…

桐島：5dx>=9 精神

(5DX10>=9) → 7[2,3,5,6,7] → 7 → 失敗

GM：あれ…？おかしいな？2,3人失敗してもらうつもりだったのに…

七種：今回やっとカバーリング握ったから暴走しなくなかったんだよ！

桐島：意志対策してないの精神高めの俺と未羽だけだからなあ

◆クライマックス戦闘

この時点での侵蝕率と行動値と HP

雨宮 106% 8 HP28

桐島 121% 10 HP25

佐藤 102% 22 HP24

七種 97% 7 HP29

マスターアルカヌム 120% 14 HP???

犬走 (オルトロス EX) 120% 22 HP182

エンゲージは PC たちのエンゲージが一つ、その前方に犬走と蠢く怪物 5 体のエンゲージ、その奥にマスターアルカヌムと蠢く怪物 3 体のエンゲージがあった。

距離については GM が設定し忘れていたが PL たちの温情からか見逃されていた。

1 ラウンド目

▼セットアップ

桐島：Set:アクセル+原初の白:限界突破 行動値+10:限界突破指定/雲散霧消:浸食値+6
↑100%

七種：《クロックフィールド》セットアップ/自動成功/範囲(選択)/至近/4/RW34/ラウンド
中【行動値】+5/シナリオ[LV]回

雨宮：《常勝の天才》！ 全員 atk+32

マスターアルカヌム：《螺旋の悪魔》2 暴走を受ける。ウロボロスのエフェクトを合わせた
攻撃の攻撃力を[lv*3]する

これによって、佐藤、桐島両名の行動値が 27、雨宮が 13、七種が 12 となる。またここで
エネミーがエフェクトの使い忘れをしているが後述する。

次に最速の 2 人の内桐島が動いた。

▼行動値 27 桐島

▽マイナーアクション

桐島：マイナーで暴走解除

▽メジャーアクション

桐島：Main:狂戦士+タブレット+多重生成 射程視界/4人/ダイス+6個/C値-1(下限6):浸
食値+11 ↑100%

これで桐島の侵蝕率は 138%になった。

続いてのイニシアチブで七種が《マグネットムーブ》により犬走を同エンゲージに引き寄
せた。

▼行動値 27 佐藤

▽メジャーアクション

佐藤：【命ず】:コンセントレイト:ソラリス+絶対の恐怖+彫像の声+風の渡し手 6(7)体対象
(侵蝕値 11)

対象はマスターアルカヌムと犬走、蠢く怪物5体をとった。

佐藤：(5+2+3+6)dx+10+1+2@(7-1) 判定/100%以上/命ず、動くな

(16DX6+13)→10[1,1,2,3,3,4,4,4,5,6,8,8,8,9,9,9]+10[4,4,4,7,8,9,10]+10[2,5,5,6]+10[6]
+10[6]+10[7]+10[7]+2[2]+13 → 85(*62)

蠢く怪物はイベイジョンで達成値12、犬走は【肉体】6で判定するも達成値は8、マスターアルカヌムは暴走によりリアクション不可(*63)だったため全員に命中した。

佐藤：9d10+22+32 ダメージ/100%以上/命ず、動くな 装甲値無視。命中した場合、シーン
中対象の【行動値】-20。マイナーアクションで解除可能。

(9D10+22+32) → 42[9,3,1,3,9,3,3,2,9]+22+32 → 96

これにより犬走のHPは半分以上奪われて86になった。

彫像の声によって犬走の行動値は2に、マスターアルカヌムの行動値は0となった。

佐藤：「さて…流石にこれだけ居ると雑草には声も届かないね？」

マスターアルカヌム：「6号から11号までやられたか…私の傷も浅くはないな」

そして佐藤の侵蝕率は113%となった。

そして次のイニシアチブ、犬走は《加速する刻》を使用した。

▼《加速する刻》 犬走

▽マイナーアクション

犬走：ウェポンスタンバイ 《雷の大弓》+《ターゲッティング》(*64)

▽メジャーアクション

犬走：ブラッドパルス 《雷の剣》+《雷の槍》+《鮮血の網》

雨宮を攻撃した。(*65)

犬走：(6+3-1)dx+21@10 ブラッドパルス

(8DX10+21) → 10[2,2,4,5,7,8,10,10]+3[2,3]+21 → 34

雨宮：4dx

(4DX10) → 9[4,4,5,9] → 9

犬走：(8DX10+21) → 10[1,2,5,5,5,8,9,10]+5[5]+21 → 36

ここで桐島が《雲散霧消》を使用してダメージを-30点して、残りをUGNボディアーマーの装甲が無効化した。しかしながら雨宮は《鮮血の網》の硬直を受けてしまった。

そしてさらにエネミーのマスターアルカヌムは《加速する刻》を使用した。

▼《加速する刻》 マスターアルカヌム

▽マイナーアクション

マスターアルカヌム：《オリジン：ヒューマン》3+《ハンドレッドガンズ》2!

マスターアルカヌム：錬金術師と最強の一振りがあるのでハンドレッドガンズの攻撃力は16点!

▽メジャーアクション

PC全員を対象に攻撃を行った。

マスターアルカナム：【マッドアルケミー】：コンセントレイト+カスタマイズ+ストライク
モード+天からの眼+ギガノトランス

そして命中判定を行うのだが、GMは卑劣にも時間を巻き戻しセットアップ時に《背徳の理》と《巨人の影》を発動したことにして、命中判定のダイスを増加させ、さらに秘匿していたエフェクトのlvを2上昇させた。(*66)

マスターアルカナム：(6+8+2+2+3)dx+3+2@7

(21DX7+5)→10[2,2,4,4,4,4,5,5,5,5,5,6,6,6,7,7,8,8,9,10,10]+10[1,2,2,6,7,9,10]+10[4,4,8]+10[8]+10[8]+3[3]+5→58

佐藤以外はガードを選択し、佐藤は回避を選択して…

佐藤：(1+3)dx+0@(10)〈回避〉判定

(4DX10)→8[3,5,7,8]→8

全員に命中した。

マスターアルカナム：(5+1+2)d10+22 ダメージは螺旋の悪魔で上昇

(8D10+22)→57[8,10,7,10,7,2,7,6]+22→79(*67)

桐島：Auto:ディヴィジョン+タブレット+多重生成 射程視界/4人/HPダメージ半分受け
持ち:浸食値+(1d10+6)

桐島は《ディヴィジョン》の代償で戦闘不能になるもタイタス昇華により復活、さらに《雲散霧消》を使用して装甲も含めて両宮は5点、桐島は2点、佐藤は6点、七種は0点とそれぞれHPダメージを受けた

マスターアルカナム：「ははは！水銀の濁流を喰らうがいい！」と言いながら弾が分身します

桐島：「げっほ…。軽いぞアルカナム！俺しか膝付いてねえなあ！」

マスターアルカナム：「な…！」

佐藤：「頼もしい限りで」

七種：「……これの何処が軽いんだどこが！感謝するぞマジで！」

両宮：「……軽いとは馬鹿を言いたまえよ、そんな闇雲にエフェクトを使っは」

ここまでで桐島の侵蝕率は157%まで上昇していた。

▼行動値17 七種

七種：「……いいか、多様性を重視する現代でこういうのは批判のマトになるかもしれないが断言してやる」

七種：「アルカナムの如き外道に組することも！従者を不健全なまでに縛ることも！」

七種：「間違っている！絶対にだ！故に！」

▽マイナーアクション

七種：《ポルターガイスト》マイナー/自動成功/自身/至近/4/100%/シーン中攻撃力+[選択した武器の攻撃力]/武器は破壊される

七種：「全力で殴るッ！言い訳と説得は後で熨斗つけてまとめて届けてやろう！」

▽メジャーアクション

七種：(4+3+2+1)dx+6@(7-1) 【ギガント・マキア】《巨匠の記憶+コンセントイレイト+クリスタライズ》メジャー/運転:多脚戦車/対決/単体/武器(至近)/7

(10DX6+6) → 10[1,2,2,3,4,5,5,7,9,9]+10[3,6,10]+10[5,9]+5[5]+6 → 41

犬走を攻撃し、犬走の回避は失敗した。

七種：5d10+17+3+32 【ギガント・マキア】ダメージ/装甲無視

(5D10+17+3+32) → 33[8,10,1,9,5]+17+3+32 → 85(*68)

かなりの大ダメージであったが犬走はHPを1残して耐えてしまった。

七種：「……いいか、まだ聞く気があるのなら」

七種：「もう、動くな」

七種：ギリギリ稼働できるだけの部位を残してオルトロスにそう呟こう

目の前の鉄塊からはただ装甲のひしゃげる音だけが響いた。

そして七種の侵蝕率は119%となった。

▼行動値13 雨宮

▽マイナーアクション

雨宮：マイナーで硬直解除、メジャーは《遣らずの雨》で攻撃

▽メジャーアクション

桐島：Auto:A ランクサポーター ダイス+2 個:自分対象不可:浸食値+2

雨宮：対象は敵全体へ

雨宮：20dx8+6 いざ参る

(20DX8+6) → 10[3,3,3,5,5,5,5,6,6,6,6,6,7,7,7,8,9,9,10,10]+10[1,3,4,4,10]+3[3]+6 → 29

雨宮：使うか《勝利の女神》

これで達成値は38となった。犬走は回避判定で22という高数値をたたき出すが《勝利の女神》の前では無力であった。さらに、マスターアルカヌムは暴走、蠢く怪物はイベイジョンにより達成値は12で攻撃はエネミー全員に命中した。

雨宮：4d10+22+2d10 《フェイタルヒット》

(4D10+22+2D10) → 21[9,3,2,7]+22+10[2,8] → 53

これで蠢く怪物は全滅し、犬走は戦闘不能となったのだが…

《王者の血》をあわせた《無限の血肉》によって犬走はHP9点で復活した>(*69)

雨宮：雨が降る。降りしきる雨はレネゲイドを鎮静化させ、レネゲイドから生まれたものを地に還し、そして高揚した戦意を鎮めていく——

雨宮：「“昨日は曇り、今日は晴れ”」

雨宮：「だが晴れ渡る空が時に忌々しく感じる時もある。そうとしか感じられない人間も居る。」

雨宮：「ちょうどいまがそんな気分だ。確かに遊は私にとって親友と呼べる存在ではなかった」

雨宮：「だけど、だから何も感じないかと言われれば。それは決してそうではない。そうではないよ」

雨宮：「いい加減何かに閉じこもって、どこか高みから見下ろして一はよしたまえ、マスターエージェント殿」

雨宮：「たまには雨でも浴びようぜ」

マスターアルカナム：「雨に濡れると寒いよ…」

雨宮：「寒いのもたまには悪くないとも」

そして雨宮の侵蝕率は 130%へ。

▼行動値 2 犬走

マスターアルカナム：「13号まで全員…残るは20号のみか…」

▽マイナーアクション

犬走：《ターゲットイング》

▽メジャーアクション

犬走：ブラッドパルス 《雷の剣》+《雷の槍》+《鮮血の網》

PC 全員を攻撃した。

犬走：(6+3-1)dx+21@10 ブラッドパルス

(8DX10+21) → 9[2,3,3,4,4,5,8,9]+21 → 30

桐島と七種はガードを選択、雨宮と佐藤は回避を試みたが失敗し攻撃は命中した。

犬走：(3+1)D10+25 ブラッドパルス 装甲有効

(4D10+25) → 19[1,9,7,2]+25 → 44

全員にダメージ…のところにカットインが…

七種：《マグネットフォース》/オート/自動成功/自身/至近/2/カバーリング/1 メインプロセスに 1 回

桐島からの要請により七種がカバーリングを行い、高い装甲値とガード値を生かし HP を 11 残して攻撃を耐えきった。

雨宮と佐藤は戦闘不能になったがロイスをタイタスにして昇華することで復活した。

さらに犬走は桐島以外に硬直を与えた。

オルトロス EX は辺りへ機体から滲む血を飛び散らせそこに電流を走らせた。

機体の内側からくぐもった悲鳴が聞こえた気がしただろう。

七種：「電撃……なら、逃し方は知っている！」咄嗟に一番近くにいた桐島氏をかばった

桐島：「おー…やっぱロボは頑丈だな」

雨宮：「さっき終わらせてやれずにすまなかったね」

雨宮：電流を受け制服に焦げ目が走り、肉の焼ける匂いが漂うが脳内回路を自分の意志で稼働させて倒れない

▼行動値 0 マスターアルカナム

▽マイナーアクション

マスターアルカナム：《ハンドレッドガンズ》

▽メジャーアクション

マスターアルカナム：【マッドアルケミー】：コンセントレイト+カスタマイズ+ストライクモード+天からの眼+クリスタライズ

狙いは装甲値の高い七種であった。

マスターアルカナム：(6+8+2+2+3)dx+3+2@7 判定

(21DX7+5)→10[1,1,1,2,2,3,3,4,4,4,5,5,5,6,7,7,7,8,8,9,10]+10[1,5,6,7,7,10,10]+5[3,4,5,5]+5 → 30

七種はガードを行った。

マスターアルカナム：(3+1+2)d10+22+9 装甲無視

(6D10+22+9) → 29[1,6,7,2,3,10]+22+9 → 60

七種は戦闘不能になったがタイタス昇華により復活した。

マスターアルカナム：「装甲の狭間からこいつを流してやる」アルキュオネウスへ弾丸が衝突した途端溶け、分子の間を縫って機体内部の七種へとダメージを与える

七種：「ぐっ……あああッ!!」

七種：「斃れはせん! ここで斃れれば誰がお前を殴れるというんだッ!!」

七種：「死んでも死んでやらんぞォ!!」と無理やり神経に電撃を流して立ちあがろう

雨宮：「死んだら複製するぞーされたくなかったら死ぬな七楽一」

七種：「それは別の意味で恐ろしいわ!!」

桐島：「持ちネタになりつつあるな、それ……ちゃんと愛してやれよ」

佐藤：「命がけの場でも軽口は出るんだね」

桐島：「おいおい、だから軽口叩くんだろ? シリアスに死んだって嬉しかねーよ」

雨宮：「えー愛するって何のことかみうわっかんない」

犬走（従者）2：「不思議な連中だね。早く“私”をどうにかしておくれ」

雨宮：「ああもちろんだ、もう少しの辛抱だよ」

次のイニシアチブでマスターアルカナムは《加速する刻Ⅱ》を使用した。

▼《加速する刻Ⅱ》 マスターアルカナム

▽マイナーアクション

マスターアルカナム：《ハンドレッドガンズ》

▽メジャーアクション

【マッドアルケミー】：コンセントレイト+カスタマイズ+ストライクモード+天からの眼
対象は佐藤をとった。

マスターアルカナム：(6+8+2+2+3)dx+3+2@7 判定

(21DX7+5)→10[1,2,3,4,4,4,5,5,5,6,7,7,7,8,8,8,8,9,9,10,10]+10[1,1,2,2,3,4,5,7,8,9,10]+10[4,6,7,7]+10[6,8]+10[10]+10[7]+5[5]+5 → 70

佐藤は回避を行ったが失敗した。

マスターアルカヌム：(7+1+2)d10+22

(10D10+22) → 50[9,8,3,9,2,5,7,3,2,2]+22→72

佐藤は戦闘不能になりタイタスを昇華して戦闘不能状態を回復した。

マスターアルカヌム：「FHに居れば私に撃たれることもなかったというのに…」

佐藤：「この程度の痛みで後悔してたらどこに行っても後悔するんじゃないのかい？」

マスターアルカヌム：「チッ！しぶとい…」

▼クリンナップ

犬走とマスターアルカヌムがそれぞれ《不死者の恩寵》を宣言し、犬走はHPを19点、マスターアルカヌムは15点回復した。

2ラウンド目

▼セットアップ

桐島：Set:アクセラ 行動値+14/浸食値+1 160↑

マスターアルカヌム：《螺旋の悪魔》

続くイニシアチブでマスターアルカヌムが《加速する刻II》を使用した。

▼《加速する刻II》 マスターアルカヌム

クリスタライズを含めた先程のコンボ【マッドアルケミー】で桐島を攻撃した。

マスターアルカヌム：(6+8+2+2+3)dx+3+2@7 判定

(21DX7+5)→10[1,1,1,3,4,5,5,5,6,6,7,8,8,8,8,9,9,10,10,10]+10[2,2,3,3,4,5,7,7,8,9,10]+10[1,6,7,9,10]+10[2,7,9]+10[4,9]+1[1]+5 → 56

桐島はリアクションでガードを行った。

マスターアルカヌム：(5+1+2)d10+22+9

(8D10+22+9) → 43[2,2,6,8,7,10,1,7]+22+9 → 74

桐島は戦闘不能になったが…

桐島：Auto:アクアウィターエ 射程視界/単体/戦闘不能解消、HP30回復/浸食値+10
…復活した。

マスターアルカヌム：「さてお前はどうか？」 極限まで圧縮した金属を放出する

桐島：心臓を穿たれ膝をつくが水のようなものが修復し再び立ち上がる

雨宮：「…」

桐島：「やっとな……治せるようになったな……」

桐島：「さて……好き勝手撃ちまくってくれたがそろそろガス欠か？」

マスターアルカヌム：「どうかな？」 多少の息切れは見える

桐島：「まだ余力があるってんなら……全力で来ることをおススメするぜ」

マスターアルカヌム：「フン…」

▼行動値 24 桐島

▽メジャーアクション

桐島：Main:狂戦士+タブレット+多重生成 射程視界/4人/ダイス+8個/C値-1(下限6):浸

食値+11 ↑160%

ここで桐島の侵蝕率は180%となった。

▼行動値22 佐藤

▽メジャーアクション

佐藤：【自決せよ】：コンセントレイト：ソラリス+絶対の恐怖+風の渡し手 6(7)体対象（侵蝕値7）

犬走とマスターアルカヌムを狙った。

佐藤：(5+2+3+8)dx+10+1+2@(7-1) 判定/100%以上/畏れよ、自決せよ

(18DX6+13)→10[1,1,2,2,3,3,3,4,4,4,4,5,7,8,8,8,9,10]+10[3,5,5,6,7,7]+10[1,1,9]+10[10]+5[5]+13 → 58

マスターアルカヌムは暴走しており、犬走の回避判定も到底この達成値は上回れなく、攻撃は成功した。

佐藤：6d10+22 ダメージ/100%以上/畏れよ、自決せよ 装甲値無視。

(6D10+22) → 29[10,1,4,6,1,7]+22 → 51

犬走は戦闘不能になったが《不死不滅》を宣言し、HP13点で蘇った。

佐藤：《シルフの詩》（侵蝕値2）：《風の渡し手》のこのシーンの使用回数+1回。1ラウンド1回。

佐藤：「流石にしぶとすぎやしないかい？」

マスターアルカヌム：「それでもなければその機体には耐えられまい」

佐藤の侵蝕率は122%となった。

▼行動値7 七種(*70)

七種は待機した。

▼行動値8 雨宮

▽メジャーアクション

雨宮：《遣らずの雨》

雨宮：19dx8+6 両方に攻撃します

(19DX8+6) → 10[1,1,1,1,1,2,3,4,4,5,5,6,7,7,7,8,9,10,10]+10[1,3,3,8]+10[9]+3[3]+6 → 39

暴走中であったマスターアルカヌムと回避に失敗した犬走は攻撃を受けた。

雨宮：4d10+22+2d10 《フェイタルヒット》

(4D10+22+2D10) → 13[2,4,3,4]+22+8[6,2] → 43

これで犬走は戦闘不能になった。

オルトロスEXは機能を停止し、マスターアルカヌムの傷も深まった。

雨宮：「……やっとか。遅くなってすまないね」

返事はなかった…

▼行動値0 マスターアルカヌム

回数を使い切るクリスタライズ付きのコンボ【マッドアルケミー】を使用、七種を標的にとった。

マスターアルカナム：(6+8+2+2+3)dx+3+2@7 判定

(21DX7+5)→10[1,1,3,4,4,4,4,4,6,6,8,8,8,9,9,9,9,9,9,10]+10[1,2,2,3,5,5,5,6,6,7,8]+3[2,3]+5 → 28

七種はガードの行動をとった。

マスターアルカナム：(2+1+2)d10+22+9 装甲無視

(5D10+22+9) → 33[10,3,10,4,6]+22+9 → 64

マスターアルカナム：「いい加減倒れろ…」水銀が装甲を貪り喰らい貫く

七種：「が……っ!」

このままイニシアチブへと移行した。

雨宮：「だーかーらー」

雨宮：「死んだら酷い目に遭うから死なないでおきたまえよ？」自分の額に指を当てる。そして、記憶を呼び覚ます

雨宮：“晴れ渡る雨”と呼ばれた母、癒しと勇気をもたらす奇跡の雨を降り注がせた母の記憶

雨宮：シンドロームの不合致。局所的なレネゲイドの再現しかできない筈の複製体の制約

雨宮：関係ない、と自分を騙す事で「奇跡を再現しろ」と脳に命令する。襲い来る負荷など、一顧だにせず

雨宮：《タイムリーオペレーション》七種復活

雨宮：11-5d10 変異暴走・自傷！ 5D10HP 減少して暴走即時解除！

(11-5D10) → 11-31[2,7,9,6,7] → -20

七種：「……！ こ、これは……」

雨宮：降り注ぐ雨に、蘇生の奇跡が「混じり」、瀕死なのは変わらないものの意識が蘇る

雨宮は戦闘不能になった。ロイスはそのままにしていた。

桐島：「……そういうこと、か。半分のやりかたは。俺よりよっぽど不器用じゃねえか何がノイマンだからうまくやる、だ」

七種：「くそ……守られてばかりで何が"歩き出す"だ」

七種：「……何が起きたか把握するのは後！ 雨宮氏への謝礼も!」

雨宮：「まあほら…」

雨宮：「私って基本的に追いかける側のようなだからね、結局」

雨宮：「追いかける側の完全再現がすぐに出来たら興冷めだろう……」頭から血を流して膝をつく

七種：「……無茶をするのは桐島氏だけだと思っていたのだがな」

桐島：「はあ……七楽、頼むわ。俺は馬鹿の怪我見てるから」

桐島：「終わらせてやれ」

七種：「そうさせてもらうさ。まったく、妙なところばかり似やがって!」

七種：「責任はとれよ、色男」と吐き捨てて立ちあがろう

▼待機 七種

七種：「……誰かに守られて立ちあがるってのが、こんなに重いとはな」

七種：「"理解者"ってのも、少しはわかってきた……まだ受け止めきれやしないってことがさ」

まず「理解者」へのロイスをタイタス昇華して硬直を解除した。

▽マイナーアクション

七種：「余のやること、やれること、やるべきことはたった一つだけ」

七種：「シンプルでいい……考えることが少なくて済む!」

マスターアルカヌムへとエンゲージした。

▽メジャーアクション

七種：(4+3+2+1+8)dx+6@6 【ギガント・マキア】《巨匠の記憶+コンセントイレイト+クリスタライズ》メジャー/運転:多脚戦車/対決/単体/武器(至近)/7

(18DX6+6)→10[1,1,1,2,2,3,4,4,6,7,7,7,8,8,8,9,10,10]+10[1,1,1,3,4,4,5,5,7,10]+10[7,10]
+4[2,4]+6 → 40

もちろん暴走によりマスターアルカヌムには当たった。

七種：5d10+17+3 【ギガント・マキア】ダメージ/装甲無視

(5D10+17+3) → 27[3,5,9,6,4]+17+3 → 47

七種：「あんたが何者なのか、そんなことアどうだって構いやしねえ!」

七種：「大事なのは! ぶん殴って目を覚ますかどうかってことだ!」

この攻撃でマスターアルカヌムのHPが残り20であることが公開された。(*71)

七種：「さあ、答えろ! ソフィア・ホーエンハイム!」全力で殴ったー

▼クリンナップ

回復の意味がないと判断してマスターアルカヌムは《不死者の恩寵》を使用せず。

3ラウンド目

▼セットアップ

マスターアルカヌムが《螺旋の悪魔》を使用した。

▼行動値 22 佐藤

▽メジャーアクション

佐藤：【畏れよ】:コンセントレイト:ソラリス+絶対の恐怖(侵蝕値4)

佐藤：(5+2+3)dx+10+1+2@(7) 判定/100%以上/畏れよ、自決せよ

(10DX7+13) → 10[1,2,2,2,3,3,4,5,8,8]+4[3,4]+13 → 27

佐藤：3d10+22 ダメージ/100%以上/畏れよ、自決せよ 装甲値無視。

(3D10+22) → 13[5,3,5]+22 → 35

マスターアルカヌムは戦闘不能になるが《原初の黒:ラストアクション》を宣言し、《原初の虚:ハイブリーディング》でそれを回復した。

▼《原初の黒:ラストアクション》 マスターアルカヌム

【マッドアルケミー】を使用し、七種を対象に選択した。

達成値は30で七種は回避をとり失敗した。

ダメージは56点だった。七種は戦闘不能となるが…

七種：「死なない、死なないんだなあ……」

七種：「託された者は倒れたりはせんのだ、その志を遂げるまで……」

七種：「……少し前に、それを教えられたよ」

このメインプロセスの終了時にマスターアルカヌムは《蘇生復活》を使用し、HP1で復活した。

佐藤の侵蝕率は126%となった。

▼行動値10 桐島

▽メジャーアクション

桐島：メジャー 白兵：ジュラミルンシールド 対象アルカヌム

桐島：13dx-3@9

(13DX9-3) → 10[1,1,2,3,3,3,3,4,5,6,7,8,9]+7[7]-3 → 14

暴走により当然命中。

桐島：2d10+2

(2D10+2) → 14[8,6]+2 → 16

マスターアルカヌムは戦闘不能になるがしかし…

桐島：「多分——俺が生涯で殴り付ける唯一の人間だよ、お前」(*72)

桐島：「ああ、クソッ、気分悪い……吐き気がする……」

《原初の黒:ラストアクション》をマスターアルカヌムは宣言した。

▼《原初の黒:ラストアクション》 マスターアルカヌム

コンボ【マッドアルケミー】で佐藤を対象に攻撃を行った。

達成値は35で佐藤の回避判定5を上回った。

ダメージは39で佐藤は戦闘不能になりタイタス昇華で復帰した。

そしてマスターアルカヌムは《巨人の影》でlvが2上がった《魂の練成》を宣言して

HP50で復活した。さらにエンブレム《狂気の沙汰》で攻撃の達成値が+5され、受けるダメージが10点減少した。

▼行動値7 七種

▽メジャーアクション

七種：(4+3+2+1)dx+6@7 【ギガント・マキア】《巨匠の記憶+コンセントイレイト+クリスタライズ》メジャー/運転:多脚戦車/対決/単体/武器(至近)/7

(10DX7+6) → 10[1,1,1,2,4,4,6,6,8,10]+10[7,7]+4[3,4]+6 → 30

七種：4d10+17+3 【ギガント・マキア】ダメージ/装甲無視

(4D10+17+3) → 15[2,1,6,6]+17+3 → 35

マスターアルカヌムの HP は 25 点残った。

▼行動値 0 マスターアルカヌム

▽マイナーアクション

《彫像の声》による行動値の低下を回復して手番を終了した。《加速する刻》《加速する刻II》の回数は尽きていた。

4 ラウンド目

▼セットアップ

桐島：Set:アクセラ 行動値+14/浸食値+1 160↑

▼行動値 24 桐島

桐島：Main:狂戦士 射程視界/単体/ダイス+8個/C値-1(下限6):浸食値+5 ↑160%

桐島：董に

侵蝕率は 186%になった。

▼行動値 22 佐藤

▽メジャーアクション

佐藤：【動くな】:コンセントレイト:ソラリス+絶対の恐怖+彫像の声(侵蝕値8)

佐藤：(5+2+3+8)dx+10+1+2@(7-1) 判定/100%以上/命ず、動くな

(18DX6+13)→10[1,1,2,3,4,4,5,6,7,7,8,8,8,8,10,10,10,10]+10[1,3,4,4,5,6,6,7,7,8,8]+10[2,5,5,7,7,8]+10[7,10,10]+10[5,8,10]+10[2,8]+3[3]+13 → 76

マスターアルカヌムは暴走を受けていたのでリアクションもなく命中。

佐藤：8d10+22 ダメージ/100%以上/命ず、動くな 装甲値無視。命中した場合、シーン中対象の【行動値】-20。マイナーアクションで解除可能。

(8D10+22) → 48[5,4,3,8,3,6,10,9]+22 → 70

蘇生手段も尽きマスターアルカヌムは戦闘不能となった。

佐藤：「随分とまあ未練がましい存在だったけれど…」

佐藤：「現世にもう君の居場所はない、それだけだよ」

マスターアルカヌム：「そうか…もう、無理か…？」

佐藤の侵蝕率は 133%となった。

戦闘は終了した。(*73)

(*62)

桐島：ヒューツ！

七種：なそ

GM：うわあ…

雨宮：おおう

佐藤：おらーっ全員固まれ！

(*63)

そう処理が行われるのが正しかったが GM は暴走のバッドステータスを忘れマスターアルカナムの達成値をイベイジョンで 4 とした計算していた（これで回避に成功したことはない）。これ以後も同様のミスを犯し続けていたが省略する。ちなみにそれ以外でもダイスマスや行動値の読み違いを連発していた。

(*64)

雨宮：ターゲットィング！PC だとほぼ出番ないターゲットィングじゃないか！

七種：普段使えないエフェクトを使うためにエネミーを組んでいる節はあります

佐藤：マイナーでダイス増加系なんて普通取らないからな…

(*65)

雨宮：私だけ？

雨宮：と思ったら大弓か（《雷の大弓》は攻撃の対象を単体に限定する）

桐島：剣と槍は同エンゲージだから不可だぜー！

雨宮：雷の剣は至近可能になるのだ…

桐島：なん…だと…

雨宮：複雑だぜ！

(*66)

GM：すみません、螺旋の悪魔使ったときに《背徳の理》と《巨人の影》つかったことにしていいですか？

桐島：いいよ！

七種：いいんだ…

佐藤：あるある

GM：データ管理のできない GM ですまない…

(*67)

桐島：っしゃあ！低いな！

雨宮：走りすぎだ！

七種：低い…低い…？

GM：上振れた方なんだけどな…

雨宮：8d10 で 57 は普通にヤバイ値

桐島：受けられなくなる範囲が 110 点くらいだから…

佐藤：半減して軽減はやっぱりデカイね

(*68)

桐島：ダイス数増加も忘れておるぞ…(クリティカル値の減少も一度忘れてる)

七種：もういろいろダメだ

GM：命中判定…振り直してもいいよ…GMが見過ごしたガバだから…

雨宮：他人からの施しは受けないという

桐島：ダメージダイスいいからこれ越えるのかって言うと中々

GM：高貴だなあ…

七種：そうかな…そうかも…

七種：今回はこのままで！ 普通に見過ごした自分が悪い！

なぜ GM は振り足しという手段を思いつかなかったのか…

(*69)

桐島：うへえ蘇生か

七種：うぐぐ面倒な

(*70)

行動値の読み間違いがあった。

(*71)

ボスはこの時点でさらに2回復効果を持っていた。

(*72)

七種：桐島氏が殴るのマジで珍しいな…

(*73)

この戦闘がどのように PL から評価されたかは想像に難くないだろう。言い訳は特にないが、戦闘中になぜ調整しなかったについてだけ一言述べておく。指摘を受けてまずいと思ったときにはエフェクトの殆どを開示しており、さらに秘匿していたエフェクトも文字数までは公開していてさらに HP はどう弄ろうと大して意味のないレベルになっていたため GM は半ば錯乱状態で元のままの戦闘を続行してしまった。

▽シーン 13 アフター

戦闘後、そこには倒れた無数の異形と壊れたオルトロス、そして満身創痍で辛うじて立っているマスターアルカヌムが居た。

マスターアルカヌム：「まだだ…私はまだ生きる…不完全なまま棄てられたくない…」

マスターアルカヌムは何かに怯えているようだがどうでもよいことだ。

この間に桐島は桜庭を回収した。

七種：「棄てる……？」ちょっと疑問に思おう

マスターアルカヌム：「そう…私は人造人間(ホムンクルス)…不出来で愚かな失敗作…完璧にならなきゃ棄てられる…」

マスターアルカヌム：「だから、棄てられる前にみんなを棄てた…でもまだ足りない…今度は寿命が迫る…世界が私を棄てる…」

佐藤：「要領を得ないね」

桐島：「寿命で死ぬのも嫌とか贅沢な奴だな」

七種：「アルカヌム……いや、ホーエンハイム殿も作られた側だということか……」

マスターアルカヌム：「私は“私(ソフィア)”を生きなきゃ…」

マスターアルカヌム：「完全にならなきゃ…私は失敗できない…だから他人で失敗する…皆私の実験体…」

雨宮：「…ま、寿命の関係とか、自由が無かったとか同情の余地は無くはないんだろうけれど」

雨宮：「だから他人に対してなんでもやっていいと言われれば決してそうではないからね」

桐島：「誰も他人を害して幸福になる権利は、持ってない」

雨宮：「きみは一線を踏み越えてしまった、だから終わり。この話はそれ以上でも以下でもない」

佐藤：「使い捨ての駒なんてものは存在しないからね。たとえ道具だとしても」

七種：「うむ、如何なる理由があれど他人を害する訳にはならん」

七種：「……そしてそれはそのまま、“自分”をどう扱ってもよいわけではない、ということに通ずる」

マスターアルカヌム：「いやだ、私は、私は…」(*74)

七種：「……ま、言いたいことはだな」

七種：と、ソフィアに近寄ってから

七種：「あんたは"生きるべき"だ、と余は考えるよ」

七種：「不完全なまま生きてみるってのも、経験のうちさね」

七種：「そいつをどう捉えるかは"ホーエンハイム殿"次第だが……」

七種：「もしも道を違えたり、あるいは何かヤバいことになったなら」

七種：「このとおり、素敵な先輩方が」と皆を指して

七種：「……殴りに来てくれるだろうよ」

佐藤：「私からも一言。そもそもだけれど…」

佐藤：「君の言う不完全だから捨てられる、というのが私にはさほど理解できなくてね」

佐藤：「そんな縁に囚われて進めないというのであれば、余りよくないと言わざるを得ない」

佐藤：「どうしても、不完全に満足できないというのであれば…少しだけ、枷をかけるとしよう」

佐藤：「"今の形"をもう少し評価してあげてもいいんじゃないかな？」(*75)

雨宮：「残った残滓に言うておこう」

雨宮：「気が向いたらいつでも、我が部員を返しに来ていいぞ」

ホーエンハイム：「だって“私(アインス)”…私の知らなかった私…」

ホーエンハイム：「完全じゃなくても助けてくれるって、今の私も認めてくれるって…」

ホーエンハイム：「あなたの役割は終わった…“私(アインス)”の罪はぬぐえないから消えてもらうしかないけど…私だけはあなたにお礼を言うね…あなたのお蔭で私はやっと生きれる」

ホーエンハイム：「あ、あの、皆さん!ただいまって言うてもいいですか?」

桐島：「……もちろん」

七種：「ただし、小さい声でな! もう遅いし……周りの迷惑になる!」

佐藤：「どうぞ」

雨宮：「あと、今後は肝試しするときはなるべく多くの人間に声をかけたまえよ」

桐島：「こんな森の奥に近所もクソもねえだろ…」

ホーエンハイム：「は、はい…気をつけます…」

ホーエンハイム：「た、ただいま…」

犬走(従者)2：「やっと迷子は見つかったようね…さて、“私”はどうしてくれるのかしら?このまま UGN に引き渡されちゃうのかしら…?’ 大げさに困ったような顔をしながら

雨宮：「やあ、遊。首を吊るのが犯罪になるならそうかもしれないが」

佐藤：「引き渡されて困ると言われると UGN が血も涙もない組織みたいじゃないか」

桐島：「FH よかどっちもあるわ」

犬走(従者)2：「機械に操られてとは言え“私”も無実とは言えないもの…」

桐島：「いいだろ、別に。UGN は人手不足なんだ。もうやらかさねえなら受け入れ皿はいくらでもある」

七種：「それに、罪を犯したなら償うのが常道というものさ」(*76)

桐島：「ダブルクロスなんざ珍しくもねえ」

佐藤：「そうそう、多少文句くらいは言われるだろうけれど普通の学園生活を送れる方がずっと楽だよ」

雨宮：「ま、どうしても逮捕されたいというならそれは止めないが」

桐島：「人ってのはそれなりに規則守って正しく生きる方が息がしやすくできてんだよ」

犬走(従者)2:「いや…牢屋なんて絶対窮屈…」

犬走(従者)2:「じゃあ、そこから私を起こす方法を教えるわ…といっても数日かかるでしょうけど」

犬走(従者)2:「中身…そこそこグロテスクだから気をつけて…」

雨宮:「グロかぁ…」

佐藤:「悪趣味なものも見飽きたから大丈夫だよ」

桐島:「俺慣れてるから俺先行するか?」(*77)

七種:「いやな慣れ方をしてるな……」

雨宮:「いやいいよ、私が行かねばね」

桐島:「そか」

犬走(従者)2:「ハッチを開ければ状況は大体わかるわ…」

犬走(従者)2:「じゃあ、雨宮さん頼めるかしら?」

雨宮:「もちろん」

オルトロス EX の内部に居る犬走遊の本体は本来四肢と目のあるべき部位がケーブルなどの機械類に置き換わっており人と呼ぶのも疑問の残る状況であった。

雨宮:「こういう方向性か…」

佐藤:「ふーむ、この辺りうまく補える義眼とかはあるのかな」

桐島:「絡繰りは分かんねえんだよな…」

犬走(従者)2:「オルトロスを分解すれば“私”が生活を送るのに必要なパーツくらいはそろうでしょうね…」

犬走(従者)2:「生憎私には技術がないのだけれど…そうね、14…いえ七種さんならできるかもしれないわ…」

犬走(従者)2:「その乗り物、自分で改造しているんでしょう?」

雨宮:「私もノイマンの端くれだ、可能そうならサポートしよう」

七種:「……まあな、できなくはないさ」

七種:「犬走氏の自立が助けられるのなら、この七種七楽、全力を尽くそうではないか……ただし!」

犬走(従者)2:「ああ…やってくれるならという前提を忘れていたわね…」肩をすくめる

犬走(従者)2:「…っと?」

七種:「ああそうだ。余は技術を安売りするつもりはない……これでも結構カネが必要な身の上だからな」

七種:「だから条件を付けるぞ、犬走氏」

犬走(従者)2:「なにかしら…?私も学生が持てる額しかないわよ?」

七種:「簡単さ。今後何かやろうとしたら……まずは相談したまえ!」(*78)

七種:「幸い、氏には類稀なる優秀な友人がおるのだからな!」

七種:「一人で暴走する前に、まずは声掛け! これを徹底すると約束するのなら」

七種：「余は他には何もいらぬ!」

犬走(従者)2：「いえ…もともとは雨宮さんだけをちょっと脅かして話を聴いてもらうつもり
だっただけ…言い訳ね…」

雨宮：「はっはっは」

犬走(従者)2：「なら、折角また会えたから…頼りにさせてもらおうかしら…七種さん…」

犬走(従者)2：「条件は呑むわ…なんなら今後足してもいいわ…助けてくれるかしら？」

七種：「応とも!」

七種：腰に手を当てて高笑い。

佐藤：「そうと決まれば必要パーツをさっさと拝借してしまおうじゃないか」

佐藤：「下手に手続きが必要になると面倒だろう？」

桐島：「肉体労働だあ…」

クライマックスフェイズ後のバックトラックではEロイス 11 個を含めて各々、

雨宮 67%

桐島 84%

佐藤 41%

七種 30%

となった。

(*74)

GM：それではこの辺りで選択股です

GM：ソフィアを取り返すか、それともこの悪党を永久に屠るか…

GM：ソフィアへのロイスがあればソフィアを取り戻しマスターアルカヌムの人格をほとんど
消滅させられますがしこり程度には残ります

GM：もうひとつはここでソフィアの体ごとマスターアルカヌムを殺すか

GM：あるいはこいつを見逃すか

GM：以上の3択ですね

佐藤：見逃す選択肢はないな！

桐島：だな！

七種：ロイスも残ってるし取り戻したいですぜ!

(*75)

佐藤：とりあえずうつ病患者にお薬&カウンセリング撃ち込む的なあれだ

七種：桐島氏以外が積極的に説得に向かうのは意外と珍しい気がする

雨宮：むしろ啓一は興味薄いタイプだろうし…

佐藤：説得と言うかおくすりが必要な治療と判断したからね…

桐島：ソフィアが帰って来るならそれはそれでいいんだけど

桐島：アルカヌムだけはまじで無理なんで…

(*76)

佐藤：元 FH が多すぎて葛藤にすらならねえ！

七種：そうだね*1

桐島：そうだね×2

GM：なんだこいつら…

七種：なんなんでしょうね…

(*77)

桐島：やだな自分の身体でグロ画像見慣れるの

佐藤：コワ-

佐藤：董はまあ"遺産"関係の研究してたらそういう悪趣味なのって結構あるだろうなあって思ったので多分見飽きてる

(*78)

桐島：「オーヴァード大体報連相しなさすぎ問題」

七種：「個人主義者が多いからなあ……」

桐島：「困ったもんだ」

■エンディングフェイズ

▽シーン 14 : A Life

森での一件から数日後…

放課後の校舎前、奇妙な 3 人組が居た。

犬走遊(*79) : 「新しい名前は気に入ってくれたかしら?“私”?」

犬走慧(*80) : 「前の私が死ぬ前に欲しかったわ“私”…それより義体の調子はどう…?’ (*81)

遊 : 「好調よ…自分の足で歩けるって素晴らしいわ…」

ホーエンハイム : 「何か混乱してきました…」

そんな会話をキミたちは聞いた。

雨宮 : 「ややこしい事になってるなあ」

桐島 : 「平穩に過ごせてるなら幸いだろ」

雨宮 : 「まあ私は伊達に《写真記憶》ではないのでね… 髪の毛がわずかに跳ねてるとか制服のシワの位置とかで見分けはバッチリだから問題ないが」

佐藤 : 「健やかそうでなによりだ」

桐島 : 「全く見分け付かん」

桜庭 : 「…わからん、わからん」

桐島 : 「なー」

七種 : 「そうか? 割と見分けが付きやすい方だと思うが……」

遊 : 「ふーん？」

七種 : 「ほれ、例えばあの義体は稼働時に空気の抜ける音がするんだが、これはアクチュエータの種類が違ってだな……」

佐藤 : 「本人が区別付ける意志がないのなら別に区別しなくてもいいと思うけれどね」

桐島 : 「うーんこの解答は減点ですね」

慧 : 「あ…そういうのね…」

七種 : 「空力アクチュエータを多用しているものと、それから軸受けに次世代樹脂を……」

桐島 : 「今ので七楽君への女子の好感度が下がりました」

七種 : 「なぜえ?!」

桐島 : 「理論なんか誰も求めてねえんだよなあ〜」

七種 : 「そんな……余はただ皆にキチンと見分けるコツを伝授したかっただけだ!」

七種 : 「だいたい表情とか話し方とか、顔を見れば結構見分けがつくだろう!？」

雨宮 : 「先にそれ言っておきたまえよ」

桐島 : 「そうそうそういうのでいいんだよそういうので」

慧 : 「そうよ…がっかり…でも、七種さんらしくてそういうの好きよ…」

遊 : 「ん?いま何か大事なことを聞き逃した気がするわ…」 (*82)

桐島 : 「……今のうちに理解しておいた方がいいぜ七楽」

桐島：「いいか？現実ってのはえ？今？って時に襲ってくるんだ……俺のようにな……」

七種：「せ……説得力がすごい！」

桜庭：「何の話だろうね？」とぼける

佐藤：「頑張りたまえよ青少年」

桐島：「誰も傷つけないなら猶更、な」

遊：「ふふふ、楽しい…これが日常なのね…」

桐島：「足突っ込まなくていい方にも若干踏み入れてる感があるが…ま、そうだな」

桐島：「これが日常だ」

雨宮：「何カッコつけてるんだい啓一」

雨宮：「言っとくけど後で話があるから」

桐島：「かっこつけてねーって。俺は日常代表みたいな所が……」

桐島：「お、お手柔らかにお願いします……」

桜庭：「二人きり…？」

桐島：「ま、待て清羅！浮気じゃない！」

桜庭：「…一応、一応、信じるね…あとでなんか変に隠したりしたらシメるから…」

桐島：「……こうなるんだ。七楽。なりたくねえだろ」

七種：「ああ……肝に銘じておくよ」

雨宮：「はっはっはやだなー清羅落ち着き給えよー親友だろ私たちさー」

桜庭：「……………うん」

空は雲ひとつない快晴だった。翳りなど見えなかった。

(*79)

オルトロス EX に乗っていた犬走遊の本体。四肢と眼球が義体になった。

(*80)

従者の犬走遊。シナリオ中 3 人目。役目から解放されたあとに生成された従者のためゲームではない。犬走遊の双子として新たに戸籍を得た。

(*81)

雨宮：ややこしい事になっておる

佐藤：俺もそう思うぞ俺

桐島：ロボに乗り込んで学園生活送ってるやつに比べたら義体マシマシなのってまだ普通なのスゴいな…

七種：なんなら DR の口絵の時点ですごい変な生徒いるからな…空飛んだり

佐藤：高性能な義肢なら一見すると普通の人間に見えるだろうしね…

GM：公式が変なの出してくれるとありがたいぜー！

(*82)

元の会話は以下のものであった。

遊：「ん？いま何か聞き捨てならないこと聞いた気がするわ…」

雨宮：「まあ多分気のせいだろう…」

▽シーン 15 : Life Is Trifles

遊たちと別れて雨宮、桐島、桜庭の3名は校内のカフェへ来ていた。(*83)

雨宮：「さて、まずはお疲れ様だ二人とも。流石にマスターというだけあって強敵だったねえ」

桐島：「俺あんま仕事した感じなかったからなあ……未羽のが無理してたろ」

桜庭：「うん…大変だったみたいだね…起きたら皆ボロボロだったもんね…」

桜庭：「ごめんね…私の問題に巻き込んで…」

桐島：「いいんだよ、俺は元からそのつもりだった」

雨宮：「いやいや。誰の問題だったろうと最終的に解決に向かったのは同じだったろう」

桜庭：「どうせ居ないと思ってた…居なければいいなと思ってたけど…怖いマスターはいなくなった…ありがとう…」

桐島：「……うん」

雨宮：「そうだね。これで清羅の諸問題は解決したわけだ」

桜庭：「うん、ホントにありがとう…それで、たぶんその話じゃないよね…？」

雨宮：「……んーまあ……関係ないといえば無いのだけど…」

雨宮：「どうやら私の問題も、解決を見たようなのでね」

桐島：「……そうか」

雨宮：「啓一」

桐島：「おう」

雨宮：「私は……」

雨宮：「私は不幸だ」

桜庭：「……」しばらく口を挟まないでおこう

雨宮：「貧困地域で何も食べる物が無い？ 紛争地域の少年兵？」

雨宮：「一家全員ジャーム化して生き残ってしまった UGN チルドレン？」

雨宮：「暴走して生まれ育った街の住人を皆殺しにしてしまった事に後から気づいたオーヴァード？」

雨宮：「賢者の石の適合者？ これは噂しか聞いた事ないけど輪廻の獣とかいうやつ？」

雨宮：「知るかー！ー！ー！ー！！ 私が世界で一番不幸じゃボケー！ー！ー！ー！！！！」

雨宮：「って感じ今」

桐島：「……すまん」

雨宮：「………だから」

雨宮：「母さんより不幸だ、私」

桐島：「……それ、は。お前、解決って」

桐島：「何も……」

雨宮：「まあ、ね。君はもちろんそんな事意図してないだろうし、意図してたらむしろ困るけど」

雨宮：「そもそも私の抱えてる問題は私のエゴでしかないわけだけど」

雨宮：「まあ……私も視野が狭かったという事なのだろうよ」

雨宮：「目が覚めた、君のおかげだ。…それを言いたかった」

桐島：「目が覚めて……なら、これから未羽はどうするんだ」

雨宮：「まあ……ずっとこうして生きてきたからすぐには難しいだろうけど」

雨宮：「もうちょい自由に生きてみるとするよ。……何？まさか自殺とかするとか思ってた系？」

桐島：「いやそれは思ってねえけどさ…」

桐島：「つい先日フることになった女に一番不幸だなんだと言われるとな……」(*84)

雨宮：「だがそれが故に籠の鳥は解き放たれたのだよ啓一」

桐島：「幸せになって欲しいって言いながら、俺は…お前をただ不幸にただけなんじゃないかって…」

雨宮：「フッ。バカを言いたまえ」

雨宮：「ドン底の人生を迎えた後ハッピーエンド迎える方が、健やかな家庭で何不自由なく育った人生の後にド級のバッドイベントが訪れる方がずっと後味が悪い、という事を身をもって実感した、訳だが…」

雨宮：「人生はそれで終わりではないからね」

雨宮：「何せ私は畏敬する父が作り出したクローンだ！ 寿命が短いとかそんな事すらもない完璧な存在なのだぞ！」

桐島：「アルカヌムみて一なこと言ってんぞ」

桐島：「いや寿命長いのはいいことだけだよ」

雨宮：「違います一今の私は自分自信に対しての自信に満ち溢れてるから一」

雨宮：「だから—————」

桐島：「ん、そうか。いいことだ」

雨宮：「だから清羅から啓一を奪い取る事だって出来ると」

雨宮：「私は信じている！」

桐島：「んん？」

桐島：「未羽？」

桜庭：「待って！待って！ここで！今！そういうこと言う！？」

雨宮：「もうじき夏休みだ。夏と言えば海だ。海は人を開放的な気分にさせる——」

雨宮：「いやー楽しみだねー諸君」

桜庭：「いやいやいや…嘘でしょ…」

雨宮：「大丈夫だよ清羅」

雨宮：「だって啓一ってば、私が“男というのは繁殖欲だけの生物だよ”と言った際に否定したのだから」

雨宮：「であれば他の女の水着姿に心揺れ動く事なんて無いよねー」

桜庭：「だ、大丈夫だよね…！」

桐島：「そりゃあまあ。そうだな」

桐島：「思ったより元気そうで安心したよ……空元気なのかもしんねえけど。フリでも元気なら上等だ」

桐島：「俺の貞操観念舐めんなよ？」

雨宮：「…もう少し動揺してほしかったがね…まあいい」

桐島：「そーゆーキャラじゃねーってのは今まで分かるだろ？」

雨宮：「動揺してるからちょっと行けるかなーって…」

桜庭：「あ、そうだった…私何慌ててたんだろ…」

雨宮：「く…両者ともに効果は今一つで私は悲しい…」

桜庭：「雨宮さん…マジメに言うと私、アンタが嫌いなわけじゃない、アンタがさっき言った通り親友だって思ってる…アンタからなにかを取り上げたいとも思っていない…」

桜庭：「でも、桐島くんは私の家族だから…だから、どんな顔でアンタの気持ちと向き合えばいいか分からない…ごめん…」

桐島：「清羅」

桜庭：「何？」

桐島：「啓一」

桜庭：「…うん、啓一」

桜庭：「啓一、私はどうしたらいいかな？」

桐島：「私だけ見てろ、でいいと思う」

桜庭：「分かった…目移りしたら眼を撃ち抜くから、私だけを見て！」(*85)

桐島：「もちろん。俺は幸せになって欲しいじゃなくて、幸せにしたいって願ったのは清羅だけだから」

桜庭：「ホント、正面切ってそういうのズルい…私も…啓一だけ見て、アンタを幸せにするから…よろしく…ってやっぱ人前だとはずい！」顔から火が出そうだ

桐島：「結婚式までに慣れてくれたらいいって」

雨宮：「…………あーっあっあっ…」

雨宮：「おいィィィィやめろォォォオオここでこれ以上続けるなァァァ」

雨宮：「なくなるから！ マジで勝ち目無くなるから！」

桐島：「煽ったの未羽だろ」

雨宮：「うるさいな！」

雨宮：「そういう雰囲気出されるともう勝負決まったみたいじゃん！」

桜庭：「結婚式…うあ、うあ…」フリーズ

桐島：「決まってるんだよ！もうホイッスル鳴ってんだわ！」

雨宮：「うるせーならイエローカード出してでも試合止めたるわー！」(*86)

桐島：「お前が諦めきれねーってんなら俺に止める権利はねえけどその度にイチャイチャ見せ付けたるわ！！」

雨宮：「くっ… かくなる上は……」

雨宮：「清羅！」

桜庭：「ふぁ？」

桜庭：「なにー？」

雨宮：「……」

雨宮：「あんまり二人で話をするという事もなかったと思うから言うけれど…」

雨宮：「啓一に向ける想いと、私と君との関係は別だと思っている」

桜庭：「…？」

雨宮：「だから、まあ。 これからも友という事でよろしく」

桜庭：「うん、それはもちろん…これが原因で疎遠ってのもやだよ…」

桐島：「俺がすげー悪い男みたいになるな…」

雨宮：「ハハハハハハハハ」

雨宮：「では清羅、まず友としてショッピングにでも行かないかい？」

桜庭：「急だね…いいけど…何見る？」

雨宮：「髪留めでも、とね」

雨宮：「清羅は髪に対して無頓着に見えたから、まずそこを直してみてもうかなと、以前から少し思っていたから」

桜庭：「あー、うん、そう見えたか、無造作感って難しいな…私センスないみたいだからよろしく頼むわ…雨宮さん」

雨宮：「はっはっはーいいともーあとで編み込みの仕方とか教えちゃうもんねー」

雨宮：「この髪型毎日セットするの実は大変なんだぞうー髪長いと三つ編みレベルでもけっこうめんどくさいんだからなー」

桜庭：「おー！意外なこだわり！実は大変そうだなとは思ってたけど！いっぱい教えて雨宮先生！」

雨宮：「ふふふノイマンの情報処理力についてこれるかなー」

桜庭：「オプションルとはいえども私もノイマン！全力で演算するよ！」

桐島：「女三人寄れば姦しい……二人でも十分騒がしいが」

桐島：「楽しそうだし、いいか……」

(*87)

(*83)

セッション終了後、…

雨宮：ちょっとこのあと啓一と清羅と未羽で RP できないかなぁと思ってるんですがどうでしょう

と提案がありシーンが挿入されることになった。ちなみに3人がどこで会っていたかはこの時点では確定しておらず、続く第4話のシナリオ上でカフェに決定された。

(*84)

桜庭(GM)：この間壁にもたれかかって目をつむってそれっぽい表情で聞いています

七種：正妻の貫禄…

桐島：そんな余裕あるかな…

桜庭(GM)：よく見ると多分よくない汗をかいている

(*85)

七種：首筋バチンだったり目を狙われたり制裁が過激だな…

首筋バチンについては「Into the Storm」のクライマックスフェイズを参照。

(*86)

佐藤：勝つために時間を戻して世界を切り替えよう

GM：ループ系ボスか…

桐島：実際速度が一番重要だった感じあるので未羽とくつつく世界も普通にある…

(*87)

雨宮：というわけで要はまとめると「未羽は割と元気です」というだけの話でした

▽シーン 16 : Another Life

セント・ジョージ寮の桜庭の部屋にて桜庭とソフィアが向かいあっていた。

桜庭：「私に優しくかったマスターはアンタだったの…?」

ホーエンハイム：「…うん、私はマスターアルカヌムを知らなかった、虐待されていたあなたを可哀想に思って引き取っただけだった…」

ホーエンハイム：「自分が FH だと気づいてすらいなかった…ごめんなさい…」

桜庭：「…いいよ、私の記憶は嘘じゃなかった。私に厳しかったマスターはもういない」

桜庭：「だから…これからもよろしくね、ソフィア」

ホーエンハイム：「うん…よろしくね…清羅」(*88)

これから彼女たちは前のような明るい関係に戻れただろう…

(*88)

七種：むう…ロリおかん…

桐島：親のいる PC が増えたな！

■終わりに

初心者故のルールミスはまだマシな方で止め時を見逃したり余計に NPC を喋らせてシーンが長引いたり、大層な肩書をもつ生き汚いボスならこれくらい粘ってもいいだろうとか範囲攻撃で一か所にダメージが集中するなら単体攻撃を過剰に連発しようなど杜撰な設計をされた戦闘（少ない HP に+ α で復活や精々二回行動でよかったです）など GM(筆者)の反省点の多いセッションでしたが、PL の皆さんのおかげでどうにか次回へとつなぐことができました。

そして PC の関係がえらいことになりました。自分の持ち PC (桜庭) の RP を見返して大分暴走してしまった点を感じて気恥ずかしさを覚えており、ほどほどにいい感じになるといいなと思っています。シナリオの展開に思ったより反応が貰えたのが嬉しかったです。

まだリレーキャンペーンの途中ではありますが拙い筆者(GM)を助けていただいた PL の皆様とここまで読んでいただいた読者の皆様に感謝致します。ありがとうございました。

それでは続く次回第 4 話にご期待下さい！